深津地区遺跡群

—昭和61年度県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の概要—

付篇　粕川村三騎堂古墳群出土人骨について

1986

群馬県勢多郡粕川村教育委員会

深津地区遺跡群

—昭和61年度県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の概要—

付篇　粕川村三騎堂古墳群出土人骨について

はじめに

農業の近代化をめざした圃場整備事業は、その90％を終えようとしております。それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査は８年目を迎えるに至りました。この間数多くの貴重な文化財の調査を実施してまいりました。

今年度は群集墳の調査や弥生時代から平安時代にかけて連綿と営まれた集落の調査を行いました。これらの資料は粕川村の歴史を解明していくためにかけがえのないものと思われます。ここにその成果の一端を報告し、多くの方々に活用されることを願っております。

終りにこの調査にあたり、結始ご協力いただいた地元地権者の皆さんを始め土地改良区の役員の方々並びに発掘調査にあたられた皆さんに衷心より感謝申し上げ序といたします。

昭和62年３月20日

粕川村教育委員会
教育長　金井久雄

目　　次

はじめに
例　　言
I　発掘調査の経緯 …… 1
II　発掘調査の概要 …… 3
1　三騎堂古墳群…… 3
2　五反田遺跡…… 5
3　打越前遺跡…… 6
4　前原遺跡…… 7
5　近戸古墳群…… 7
III　昭和61年度調査の成果と課題 ……11
付　　篇
粕川村三騎堂古墳群出土人骨について
……聖マリアンナ医科大学　森本岩太郎……30

例　　言

1. 本書は昭和61年度粕川地区県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査の概要を示したものである。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、三騎堂古墳群（群馬県勢多郡粕川村深津字三騎堂784番地他）、五反田遺跡（同深津字五反田836番地他）、打越前遺跡（同深津字打越前608番地他）、近戸古墳群（同深津字近戸1503-2番地他）、前原遺跡（同深津字前原452-1番地他）の5遺跡である。
3. 発掘調査は粕川村教育委員会が昭和61年度文化財調査国庫補助金及び群馬用水土地改良事業所委託金を使用して実施した。
4. 調査は粕川村教育委員会の直営として同教育委員会社会教育主事小島純一が担当し調査員として笠原仁史が専従した。
5. 深津三騎堂古墳群2号墳出土人骨については聖マリアンナ医科大学第二解剖学教室教授、森本岩太郎先生に鑑定をお願いした。
6. 発掘調査は昭和61年8月25日より12月28日まで実施し、その後は出土品の整理及び本書の作成にあたった。
7. 発掘調査にさいし下記の方々から御指導御助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

井上唯雄　岩崎泰一　梅沢重昭　鹿田雄三　黒沢幸男　真藤金次
真藤定信　徳江秀夫　西田健彦　能登　健　望月　侃　右島和夫
粕川村土地改良区　群馬県埋蔵文化財調査事業団

I ―――――――――――――――――――――――――――――発掘調査の経緯

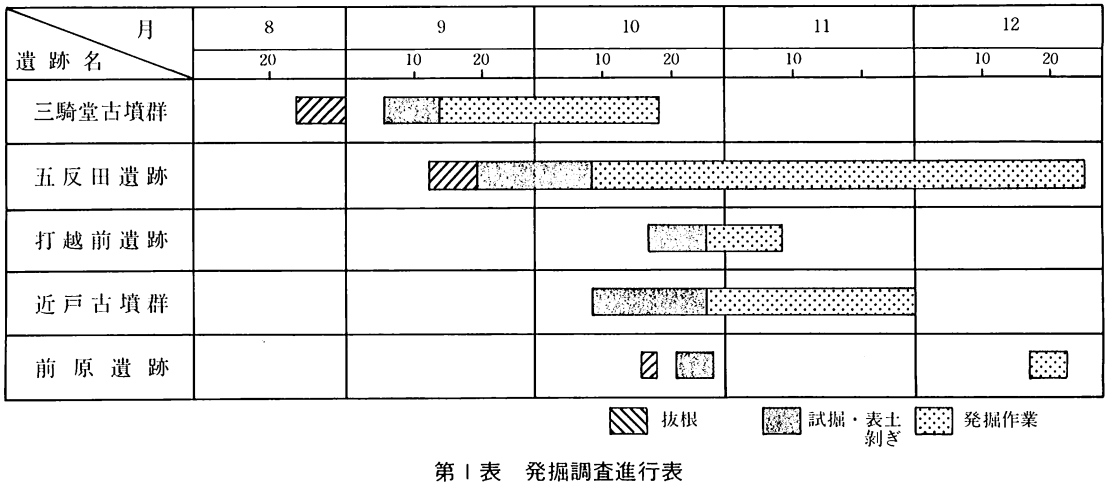
粕川村は、昭和53年から村内耕地の約70％を対象として県営圃場整備事業が行われてきている。それに係る埋蔵文化財の発掘調査も昭和54年度から開始され、圃場整備事業の調整を図りながら順調に進んできた。本年度はその第８年次目である。

昨年度の調査では赤城山南麓地域では珍しい弥生時代中期後半の13軒から成る集落や弥生時代終末から古墳時代前期にかけての環濠集落、さらには粕川村の新しい側面を見せてくれた製鉄遺跡の検出など多くの成果を上げることができた。この発掘による成果は昭和58年から昭和60年にかけて実施してた村内遺跡詳細分布調査による成果を十分に充たすものであった。この分布調査による各遺跡の分析では粕川村を含む赤城山南麓の遺跡の在り方はそれぞれ水田耕作適地を背景として成立し発展しているという分析結果を得ることができた。粕川村は水田農耕集落地域である「サト」としてとらえることができたのである。

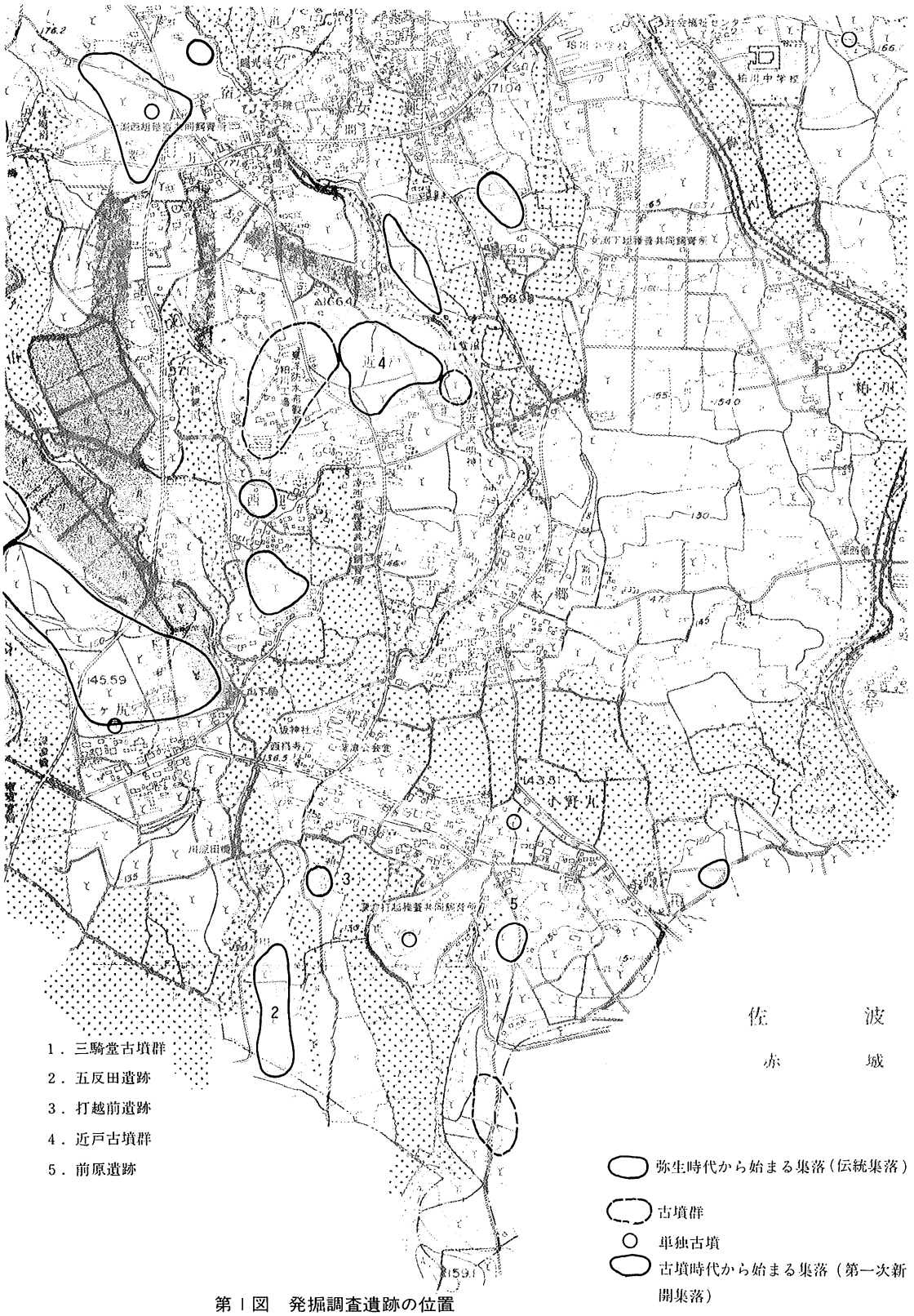
今年度は、昨年度一部調査を実施した14工区の残り部分（深津打越地区）と12工区の一部（深津近戸地区）が圃場整備工事該当区とされた。工事総面積52.2haである。教育委員会ではこれらの工事該当区域の中に５遺跡（推定39,000m²）を確認しており、これらの遺跡への対応について、工事施工者である群馬用水土地改良事業所及び粕川村土地改良区と数回にわたって協議を重ねた。この協議にあたっては群馬県教育委員会文化財保護課の有効な助力があった。

協議の結果、工事該当区域内に確認された５遺跡については、現状での保存は工事計画の変更が処々の理由により不可能であるとのことで記録保存を図ることとなった。なを、調査にあたっては圃場整備工事着工前に一部発掘調査が先行して着手できるように工事側で調整し、教育委員会では調査の期限について、昨年度と同様に12月末日を目標として発掘調査を進めるということとなった。また、発掘調査費用の一部増額が認められた。

以上の結果、三騎堂古墳群（14-11工区）、五反田遺跡（14-9工区）、打越前遺跡（14-8工区）、近戸古墳群（12-1工区）、前原遺跡（14-12工区）の５遺跡について発掘調査を実施することとなった。発掘調査は昭和61年８月25日より開始し、同年12月28日で総て完了した。発掘面積は34,800m²、発掘延参加人数は2,991人である。



第Ｉ表　発掘調査進行表



第１図　発掘調査遺跡の位置

II ―――――――――――――――――――――――――――――――発掘調査の概要

1. 三騎堂古墳群

(1) 遺跡の位置

遺跡は勢多郡粕川村深津三騎堂743番地他に所在する。粕川村の最南端部、赤堀町、前橋市との行政界が互いに接している多田山の中央部に位置している。多田山の尾根上を南北に走る農道がその行政界を成している。上毛電鉄粕川駅より南に3.4km、国道50号線赤堀町今井の交叉点から北西へ1.5kmのところであり、遺跡の南100mには多田山の二等三角点がある。

多田山は、赤城山中腹から粕川村深津を経て国道50号線付近まで延びる丘陵性台地で、周囲は粕川や桂川などによって開析されている。また、台地の東西両側には山麓開析による湿潤な沖積地が開けている。そのため、南からはこの多田山は一際高く、あたかも独立丘陵のようにみえる。

多田山上には、これまで古墳群や中世墳墓などの存在が周知されており、すでに一部では発掘調査が実施されている。この中で最も著名な遺跡は家形埴輪群を含む器材埴輪を多く出土した赤堀町今井茶臼山古墳である。この古墳は多田山の中央部、最も細く括れる部分から東にわずかに張り出す尾根上に位置している。この今井茶臼山古墳の西に隣接して三騎堂古墳群は検出された。この三騎堂古墳群は今井茶臼山古墳とともに初期群集墳を形成するものと考えられる。昭和8年、時の帝室博物館による発掘調査報告書には茶臼山古墳の周辺に、4基の小円墳が存在していたことが記されている。今回の調査で1号墳としたものはこの報告書の周辺地形図に記載されたものの一部と考えられる。

(2) おもな遺構と遺物

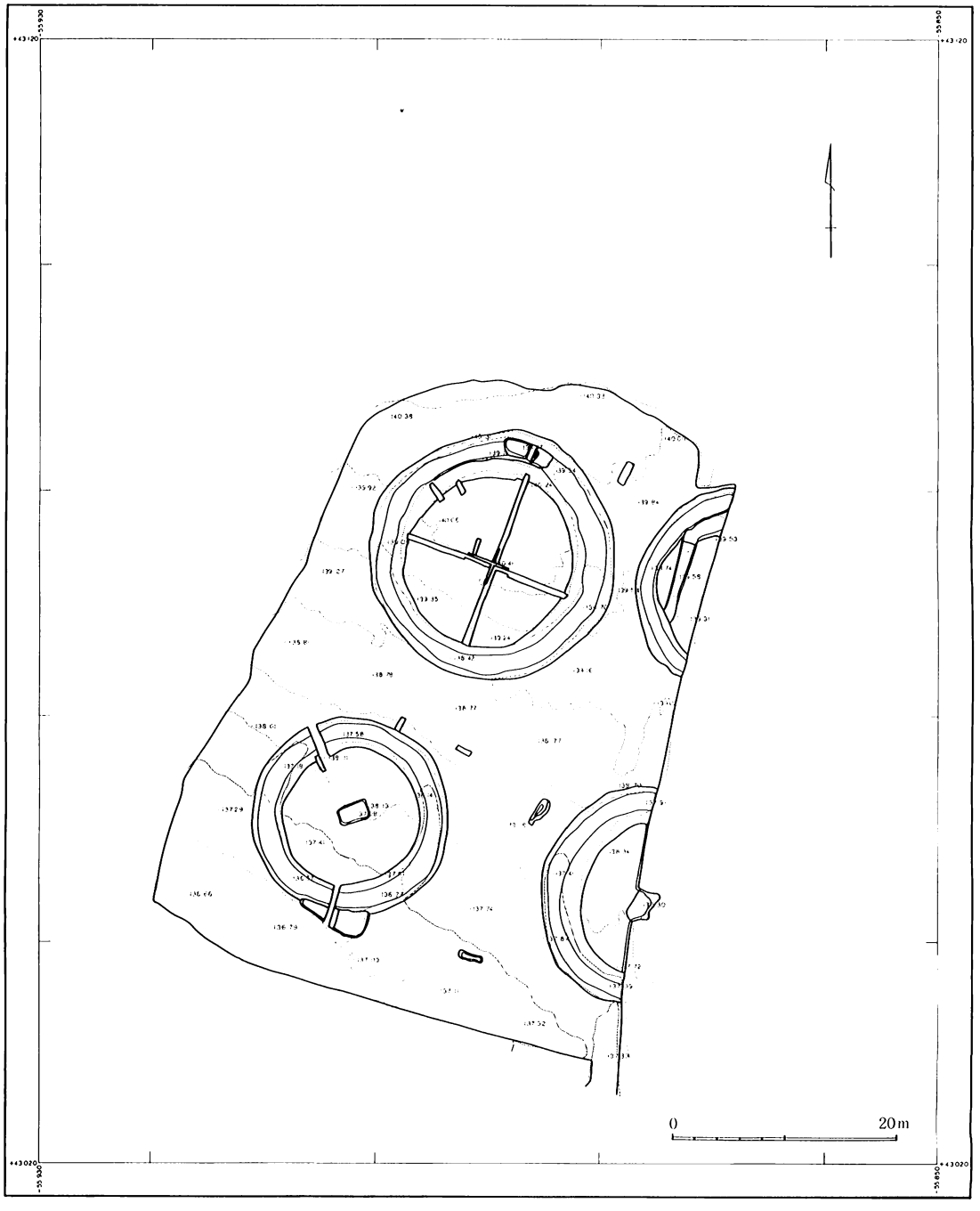
三騎堂古墳群では4基の古墳の調査を実施した。発掘地区の現況は栗林及び桑園であった。当初は現況の地形から前期古墳の存在を予想したが、試掘調査の結果、当初の予想区域より南に4基の古墳を確認した。この内、完掘できたものは一号、二号墳であり、他の三号墳、四号墳の2古墳については一部が圃場整備工事区域外の赤堀町地内にかかるため、粕川村部分についての調査を実施した。また、調査途中で四号墳の主体部が確認されたが、これも一部が工事該当区域に係るため、粕川村、赤堀町、県文化財保護課とで協議をし、その結果、土盛りをして現状保存という措置をとった。

一号墳は、発掘区の最も北に位置する古墳で、直径22.5mの円墳である。周堀は上幅3.5m、下幅1.7mで古墳を全周する。墳丘盛土はわずかに認ることができる。主体部は不明であるが、墳頂部にロームブロックが集中して認められた。円筒埴輪の樹立は考えられるが、その数は少なく原位置で確認し得たものは1点のみであった。葺石は確認できなかった。主な出土遺物は、周堀底面より土師器の小型の甕と大型坩が、また、円筒埴輪の完形品を2個体連結した状態のものが同じく周堀北側の底面より出土している。この古墳の構築年代は墳丘の断割りの結果、墳丘盛土直下にFAの純層を確認したことや出土遺物から6世紀の前半代に比定することができよう。

二号墳は、一号墳の南に位置する。直径は17.5mの円墳で、周堀は上幅3m、下幅1.35mである。墳丘盛土は石室の構築状況などから判断してほとんどなかったものと考えられる。墳丘中央には竪穴状の小礫槨が検出され、中には成人の人骨一体がほぼ完全な形で確認された。石室の構築は墳丘に土壙を掘り込みその中に根石を

据えている。石室は安山岩の山石を横位に使用し、根締めとして白色粘土を用いて全体を被覆している。天井石は4枚で構成され、やはり白色粘土を用いて根締めとし、その上をロームブロック混じりの褐色土で被っている。出土遺物は石室内より鉄の小破片が一点のみ検出されている。埴輪は全く検出されなかった。

三、四号古墳はいずれも古墳の半分を調査したにすぎない。いずれも、直径20m程の円墳になるものと考えられる。三号墳については主体部



第2図　三騎堂古墳群平面図

は不明であるが、四号墳は農道の法面に石室の石の一部が露出していたため、二号墳と同様に白色粘土によって被覆された竪穴状の小礫槨であることが明らかになった。両古墳ともに埴輪の出土をみている。特に四号墳では朝顔型の円筒埴輪を含む多量の埴輪を検出している。形象埴輪は確認できなかった。

2. 五反田遺跡

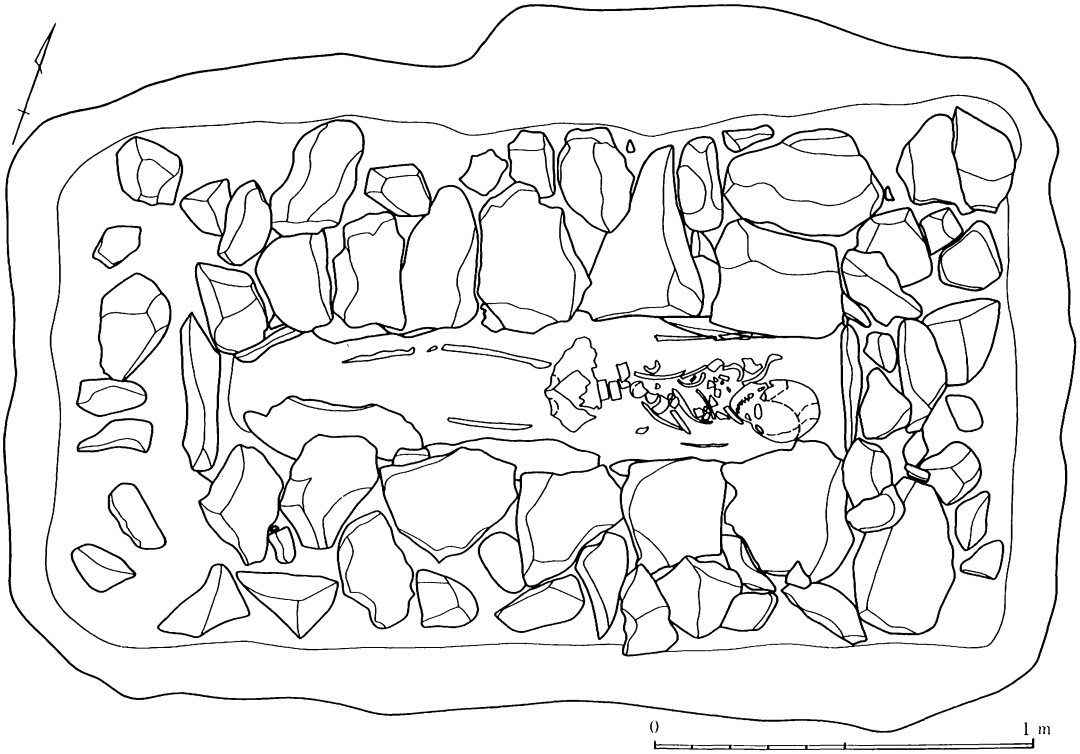
(1) 遺跡の位置

遺跡は勢多郡粕川村深津字五反田838番地他に所在する。粕川村の南部で、前橋市との行政界付近の桂川左岸に位置している。県道深津・伊勢崎線から県道今井・前橋線へと抜けていく新設の農免道路の桂川を渡る橋の北側に広がる遺跡である。遺跡の東には多田山丘陵を臨み、南100mには大室の前・中・後の三大前方後円墳が在る。また、近年、古墳時代中期の豪族の居館跡として注目を集めた梅ノ木遺跡は南東約200mに位置している。

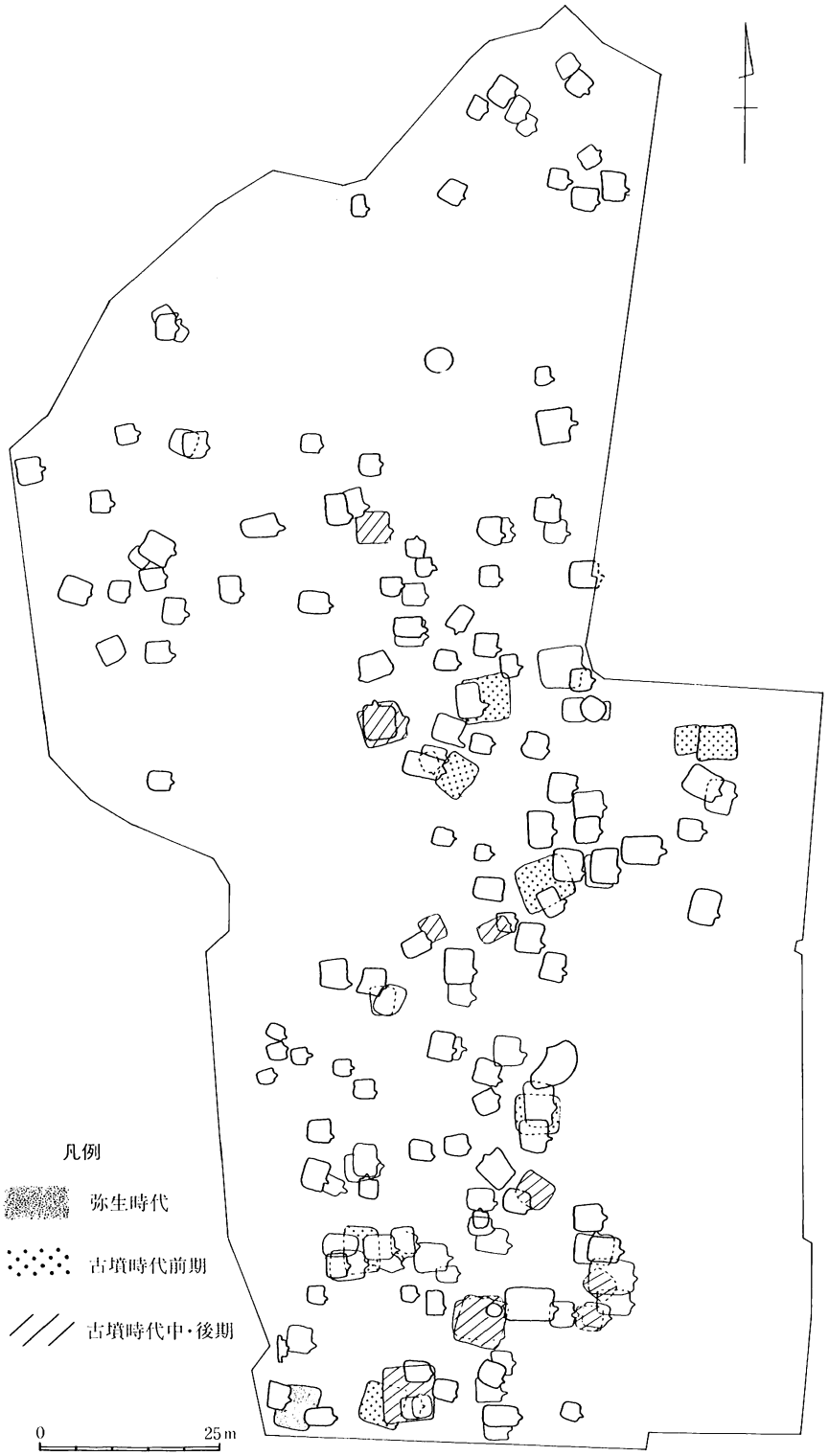
遺跡は桂川やその東に流れる東神沢川などによって形成された比較的広い沖積地内にある。この沖積地内には砂壌土性の微高地や現桂川による沖積地、多田山丘陵からの山麓開析による沖積地が入り込み、その地形は複雑な様相を呈している。このうち五反田遺跡は一部を桂川の侵食を受けた砂壌土性微高地に立地している。遺跡の標高は130mであり、南に向かって緩やかに傾斜している。

(2) おもな遺構と遺物

五反田遺跡では竪穴式住居174軒、集石遺構、石製蔵骨器などを検出、発掘調査を実施した。住居は弥生時代後期から奈良、平安時代までのものであり、絶えまなく集落が継続的していたことがうかがえる。粕川村における典型的な伝統集落のひとつであるといえよう。まだ整理がほとんど進行していない状態なので詳細は今後の課題として、粕川村のこれまでの調査遺跡に比べた場合、灰釉陶器や緑釉陶器の出土が顕著であったように思われる。



第3図　三騎堂古墳群2号墳主体図



第４図　五反田遺跡全体図

３．打越前遺跡

打越前遺跡は粕川村大字深津字打越608番地他に所在する。五反田遺跡の北約100mに位置している。ローム台地と低地とが接する部分にあたる。標高は132mである。遺跡の西は桂川によって大きく侵食され、遺跡面と４mの比高差がある。東には山麓開析による比較的幅の広い沖積地がある。現況ではこの打越前遺跡と五反田遺跡とは同じ砂壌土性微高地に立地しているように見えるが試掘調査の結果、この二遺跡の間にはAs-Bで埋没した谷地が存在していることが明らかになった。この谷地からは畦畔は確認されていないが十分に水田として耕作が可能であったと考えられる。本遺跡では平安期の竪穴式住居５軒と時期不明の溝１条の調査を実施した。また、遺跡の北にも山麓開析による浅い谷が存在したが、そこからはAs-Cの純層と弥生時代後期の櫛描文を持つ土器片が１点出土している。

4. 前原遺跡

(1) 遺跡の位置

前原遺跡は粕川村大字深津字前原452-1番地他に所在する。多田山丘陵の付け根の部分にあたる北西向き斜面に位置する。標高は145mである。遺跡の西から北にかけては山麓開析による谷が入り込んでいる。現在では谷頭部分は埋没が進行しているが、ちょうど遺跡の西にあたる谷が開ける部分では水量が豊富で、現在でも湿潤な低地を形成している。この低湿地は帯状に多田山にそって南に延び桂川にまで続いてい

(2) おもな遺構と遺物

前原遺跡では弥生時代中期後半の住居3軒について調査を実施した。1号住は最も大きく、長軸方向をほぼ南北方向に、9m×7mの長方形の竪穴式住居で中央には地床炉をもつ。炉内には焼土は少ない。明瞭な桂穴は検出できなかった。ただ、住居北側に貯蔵穴を確認している。

出土遺物は少なく住居北壁よりの床面からは浅鉢形土器が東壁よりの床面からはチャート製の石核や剝片が多く出土している。住居埋土は本遺跡検出の総ての住居に共通で、上層に As-B、下層は As-C を多量に含む黒色土、第一次埋没土はローム質の褐色土であった。

2号住は1号住の西に在る。6m×5mの長方形で、長軸方向は、ほぼ1号住と同様で南北方向である。住居中央には地床炉をもち、壁下に周溝を巡らす。主柱穴は4本、北側の壁より中央には貯蔵穴を有する。この住居の南東隅からは床面密着の状態で磨製石鏃が2個出土した。

3号住は1号住の北に位置している。5m×4mの長方形で長軸方向はやはり南北方向を示す。住居中央には地床炉、主柱穴は4本を検出している。

この前原遺跡の資料は、昨年度調査を実施した西迎遺跡の出土資料とともに粕川村における初期農耕集落を理解していく上で重要なものである。

5. 近戸古墳群

(1) 遺跡の位置

近戸古墳群は粕川村大字深津字近戸1503-2番地他に所在する。上毛電鉄新屋駅より南に1㎞のところに位置している。遺跡は赤城山中腹から続く、比較的幅の広い丘陵性台地の南傾斜面上にある遺跡である。この遺跡のある台地は、東から南にかけて桂川によって侵食されるとともに比較的広い沖積地が形成されている。西は東神沢川や山麓開析による沖積地が入り込でいる。

この近戸古墳群と同じ台地の南西200mには、昨年度調査の西迎遺跡がある。また南100mの沖積地内の砂壌土性微高地には坂田城跡が位置している。この小字近戸からその西にあたる小字聖天の地内には昭和10年の上毛古墳総覧によると8基の古墳の所在が記載されている。この内、現在まで墳丘を残すものが3基存在している。

調査にあたって、墳丘を残す古墳については極力現状保存ということを前提として圃場整備側と対応してきた。その結果、1基については圃場整備事業区域外であったため現状保存が可能であった。しかし、他の2基については新たな配反計画では現況保存が不可能な状態でありしかも計画の変更が難しいとのことで記録保存とすることとなった。さらには、今回の調査については、圃場整備工事の該当区域が畑中心地帯であることから大きな土の移動が無いために直接破壊を受ける石室を残す古墳、道路水路敷となってしまう古墳などについても調査を実施した。また同時に総覧の記載から漏れた古墳の有無についても試掘調査を実施することによって確認することとした。

以上の結果、新たに2基の古墳を確認し、それらが圃場整備工事によって直接破壊を受ける部分にあることから、墳丘を残す2号墳とともに調査を実施することになった。調査は、総覧粕川村第65号墳、第66号墳、記載漏の2古墳の

4基を対象とし、便宜的に東から近戸1、2、3（総覧粕川村66号墳）、4（総覧粕川村65号墳）号墳と呼称することとした。

(2) おもな遺構と遺物

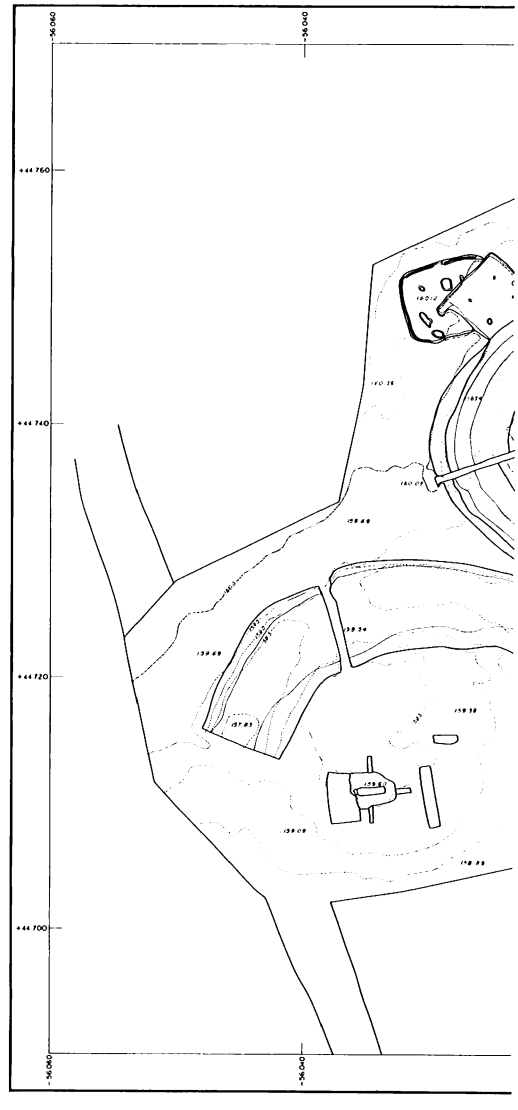
近戸1号墳は、発掘区の一番東に位置している。現況は桑畑であったが、肉眼で僅かに高まりを確認することができた。また、側壁の一部と考えられる石などが露出し、畑中の石捨て場のようになっていた。

調査は墳丘に沿って表土剝ぎを実施し、その後石室部分の調査に入った。調査の結果、両袖型の横穴式石室をもつ円墳で、石室前には前庭状の石積みと不整円形の落ち込みを持つものであることが明らかになった。周堀は全周せず石室北側のみに造られている。形状も不定形である。古墳の直径は34m程である。埴輪、葺石はない。また、本古墳は一部古墳時代前期や後期前半の住居を一部破壊して墳丘を形成している。石室は掘り方を持つもので裏込めとして円礫混じりの砂礫土を用いている。石室残存状況は比較的良好であったが出土遺物はなく、耳環3点と鉄鏃が少量確認できたのみであった。石室の形態や出土遺物などから終末期の古墳と考えられる。

2号墳は1号墳の西に位置する。直径25m程の円墳で、周堀は全周する。葺石は確認されなかったが、円筒埴輪や馬形埴輪が周堀内から多く出土している。主体部については不明である。墳頂の盛土下にはFAの純層が確認できた。古墳時代後期前半の住居の一部を切って造られている。

3号墳（総覧粕川村66号墳）は2号墳のすぐ西に隣接している。発掘区の関係で全掘はできなかったが直径39m程の円墳になるものと思われる。主体部は内面に赤色塗彩が施された小竪穴式石室である。石室の保存状態は良好で根締めとして白色粘土を用いている。天井石は4石で構成されたもので、一石を残して他の総ては残っていた。しかし、出土遺物は鉄鏃の残欠が少量出土したのみであった。地元の人の話によると昭和の初年に盗掘をうけたとのことである周堀内からは多量の円筒埴輪が検出された。

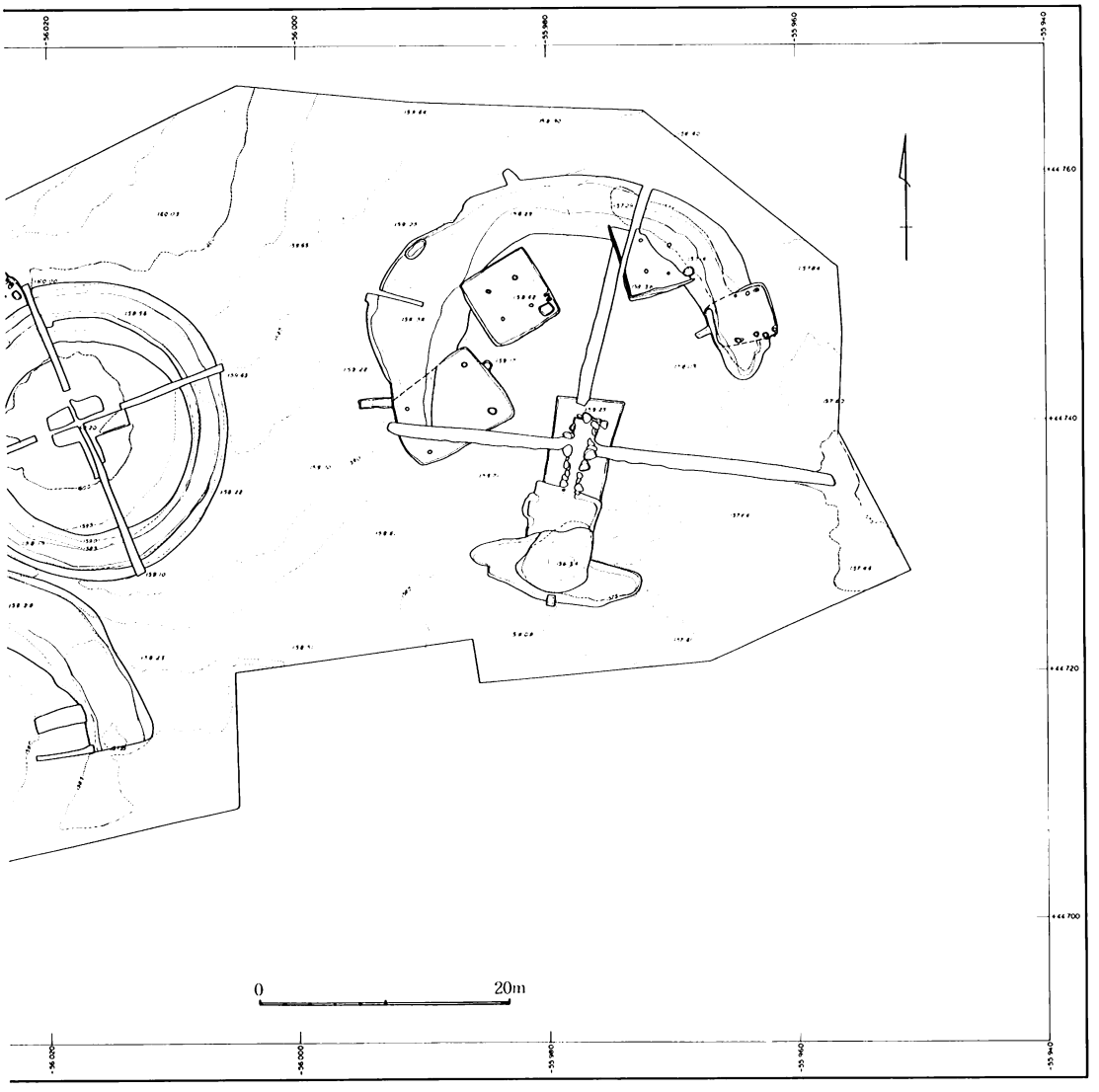
4号墳（総覧粕川村65号墳）は他の3基の古墳とは離れて、最も西に位置している。発掘前では最も良く墳丘を残していた。かつては墳頂部に庚申塔があったとのことで庚申山古墳と呼称されていたようである。この古墳は明治の初年に石採取を目的として発掘が行われ、その時の石室内の様子や出土遺物などについて克明な記録が明治10年の郡村誌に残されている。その



中には三鈴杏葉を含む馬具のセットなどもみられる。また、その時の出土遺物の一部は現在、深津近戸神社の社宝として保管されている。この近戸神社所蔵の三鈴杏葉については昭和10年発行の「上毛及上毛人　第222号」に紹介されている。

発掘調査は墳丘内にある立木の除去から開始し、その後、人力と重機とを併用して表土剝ぎを実施した。その結果、本墳は墳丘面には全体に葺石を貼り廻し、墳丘裾部は円筒埴輪によって囲繞するという当地域にあっては他に例を見ない古墳であることが明らかになった。周堀を含だ直径は約32m（内、墳丘の直径は16m）で、墳丘の残存高は1.9mである。周堀は幅約3.6m、深さ約１mで、埋土下層にはFAの純層が、最上層にはAs-Bの純層が確認されている。また、円筒埴輪列の断割を実施したところ円筒列下に幅1.8m、深さ0.8mの周堀が存在することが確認された。この内堀は第一次埋没土の形成後人為的に埋め戻されている。

主体部は破壊が著しいが、発掘調査の所見や郡村誌の記録などから判断して、凝灰岩の削り



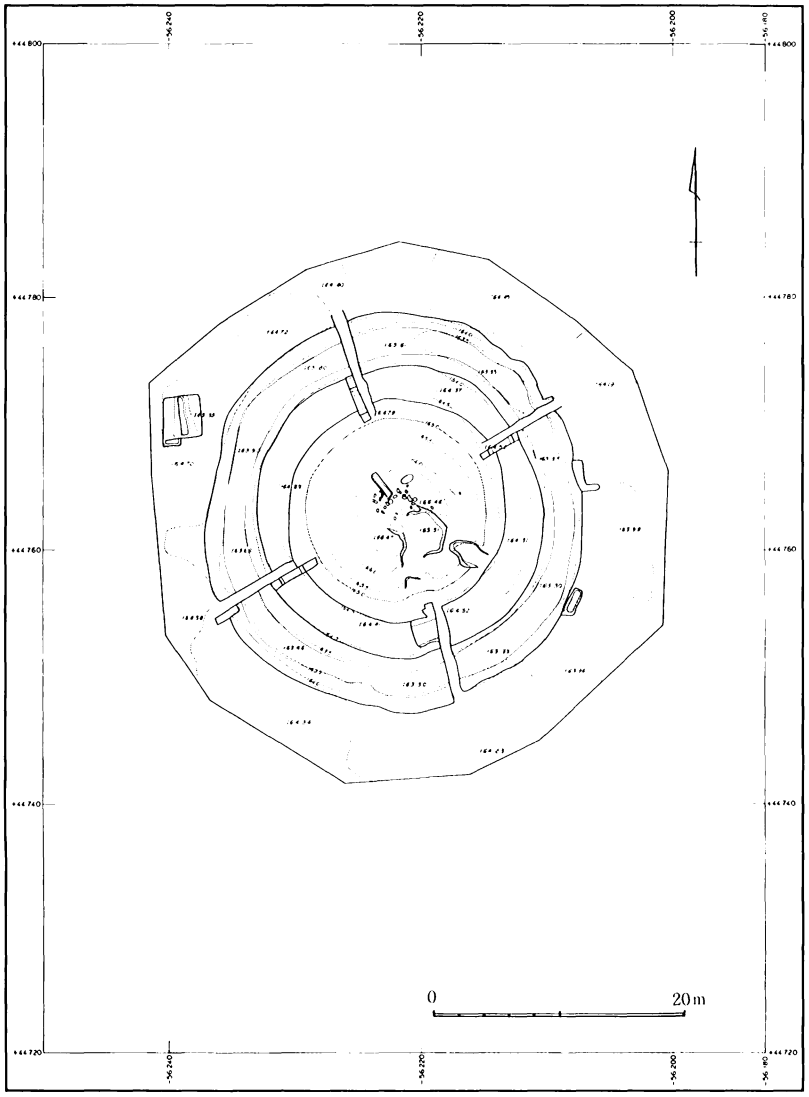
第５図　近戸古墳群2,3,4号墳平面図

石を蓋石及び短壁に用い、長壁は円礫を小口に積んだ特殊な形態の竪穴式石室であったと考えられた。石室内と考えられるところより碧玉製の管玉が1点出土している。

出土遺物は他に周堀内より三鈴杏葉が1点出土している。これは近戸神社に宝物として保管されているものと同型式のものであるが、鋳型を異にするものであると考えられる。また、多量の埴輪が出土している。墳丘裾部に土師器の集中出土が認められた。埴輪には円筒埴輪の他に朝顔型の円筒埴輪、馬型埴輪、人物埴輪が出土している。人物埴輪は小振りで赤彩されたものがある。一部の埴輪の出土状態からは円筒埴輪列からの転落とは別に古墳の外から内側にむかって転落したような状況が捉えられた。特殊な出土状態として注目できよう。また、古墳の南側の周堀に近接して縦2m、横0.76mの長方形土壙が検出され、その中からは完形の円筒埴輪が16個体もあたかも立て並べたような状態で出土している。なかには土壙の外に立てられたものが倒壊したような状況も出土状態から判断された。16個体のなかには円筒埴輪を2個体連結したものや朝顔型の円筒埴輪も認められた。

以上のことより本古墳は5世紀後半から6世紀前半にかけて造成されたものと考えられ古墳の内容からはこの古墳の被葬者が本地域におけるかなり有力な階層であったことが窺え、月田古墳群や白藤古墳群とともにこの近戸古墳群も古墳時代の粕川村を考える上で重要な位置を占めることが明らかとなった。

これらの古墳の他に古墳時代前期の住居2軒、古墳時代中期後半から後期初頭の住居3軒の調査を実施した。いずれも古墳との切り合い関係を有している。6号住は古墳時代中期後半に位置付けられるもので、初期須恵器を含む当該期の多量の土器を出土した。その内の甕の中には多量の炭化米が検出された。



第6図　近戸古墳群4号墳平面図

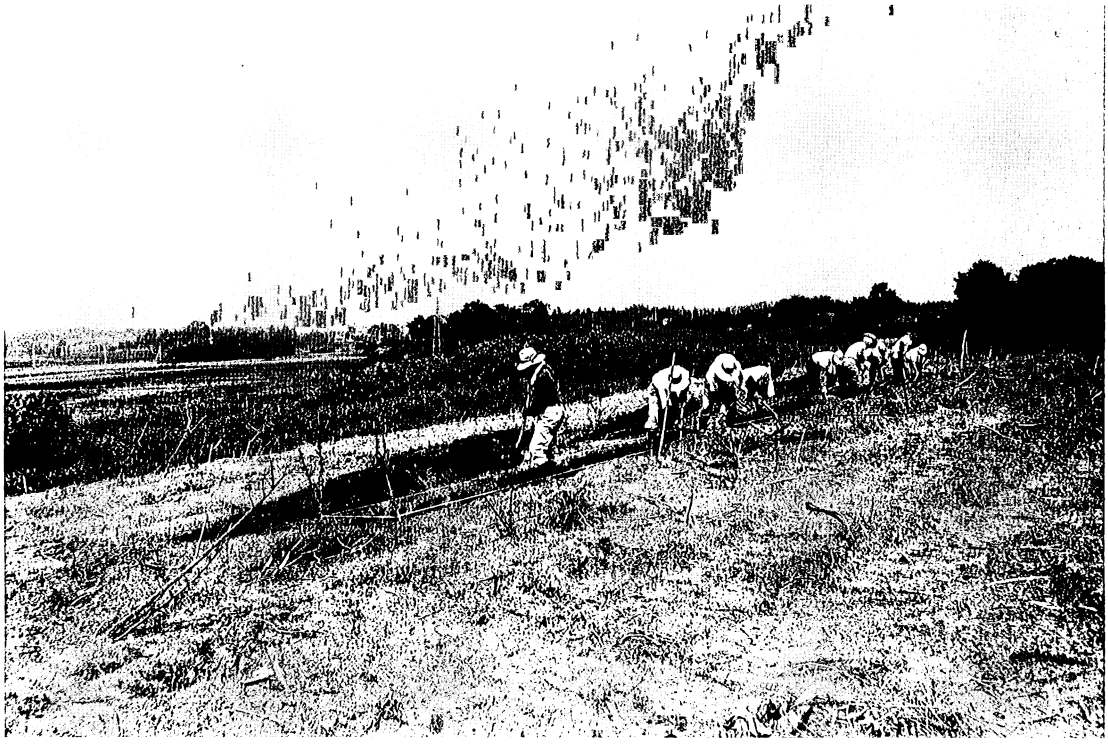
III ――――――――――――昭和61年度調査の成果と問題点

今年度は昨年に続き、深津地区の調査を実施することとなった。今回は弥生時代中期後半の小集落の調査、弥生時代後期から奈良・平安時代まで継続的に営まれた伝統集落の調査、古墳時代後期初頭の群集墳の調査をそれぞれ実施した。ここでは個々の遺跡における成果を概観するとともに問題点と今後の課題をとりあげ、まとめとしたい。

前原遺跡では弥生中期後半の３軒の住居からなる集落の調査を実施した。これは、これまで赤城山南麓地域で検出されている当該期の多くの遺跡が比較的数軒単位の小集落であるという状況と似ている。一方、昨年調査を実施した西迎遺跡では10軒を越す住居の検出があった。これら集落構成の相違は何に起因するのか。また、当該期に後続すると考えられる弥生時代後期の赤井戸式土器との関係についても不明な点が多い。赤城山南麓における初期農耕集落の進出過程とその発展の過程についての分析はまだ緒に付いたばかりである。今後の研究の進展に期待したい。

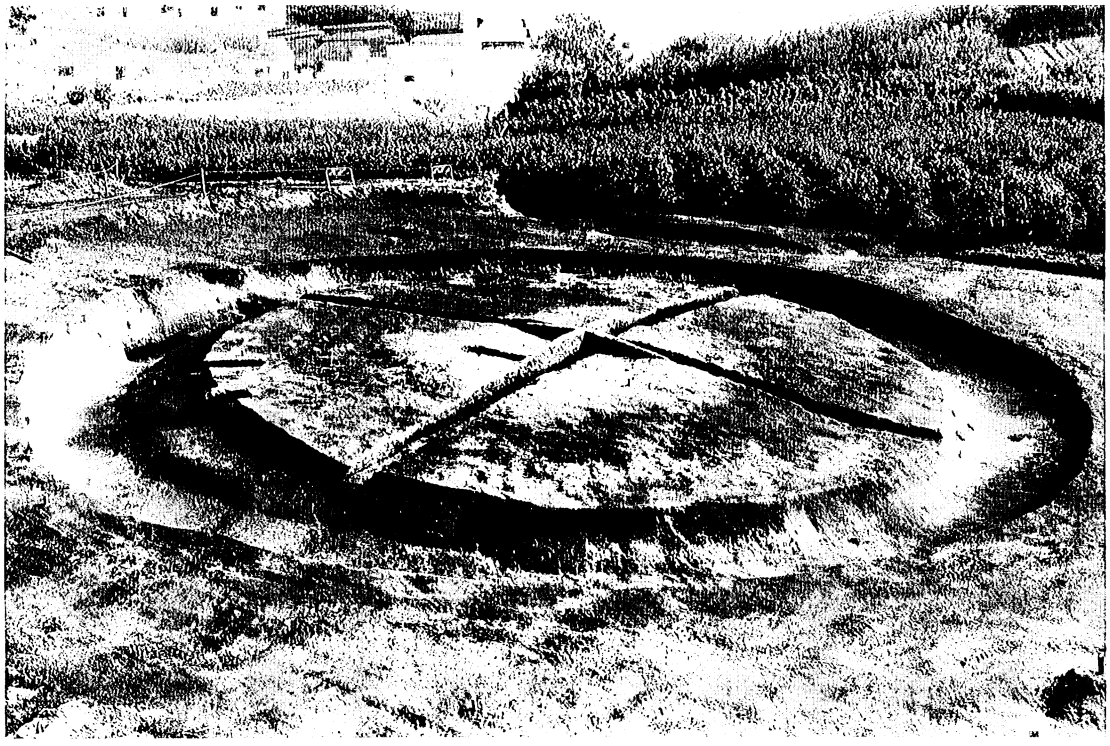
五反田遺跡は弥生時代から奈良・平安時代まで継続的に住居が営れた集落遺跡であり、170軒を越す住居の検出があった。この遺跡の範囲は調査状況から判断して南に延びるものと判断され、昭和57年度前橋市教委調査の久保皆戸遺跡Ｂ区にまでつながるものと考えられる。前橋市教委調査地区では弥生時代中期後半の住居も確認されている。いまだ整理途上ではあるが、住居数も時代を経るにしたがって増加し、遺跡の範囲も拡大する傾向を有するようである。また、五反田遺跡の北に位置し、同時に調査を実施した打越前遺跡は平安時代の住居で構成される集落遺跡であるが、この遺跡などは五反田遺跡の集落の拡大拡散の過程の中で形成された集落としてとらえることができよう。まさに典型的な伝統集落であるといえよう。ただ本区では水田を含む生産跡の検出がなされていない。この生産遺跡の検出については今後の課題としておきたい。

三騎堂、近戸では古墳時代後期前半の群集墳の調査を実施した。三騎堂古墳群は赤堀茶臼山古墳の周辺に形成された初期群集墳である。古墳の内容は先に調査を実施した白藤古墳群などとよく似ている。ただ、三騎堂古墳群は赤堀茶臼山古墳という前方後円墳を核として形成されたと考えられることや集落遺跡から離れたむしろ集落遺跡を一望するかのような丘陵地に位置していることなど白藤古墳群とは異なった在り方をしめしている。一方、近戸古墳群は白藤古墳群と比べるとやや散在的で規模も小さい。あるいは調査範囲外にある後期終末の群集墳の先駆を成すものである可能性もある。ただ古墳群が形成されていく過程で居住域を墓域へと変えていくという傾向は白藤古墳群と共通しているこれは、古墳の形成主体者による政治的な意図が反映されたものなのか。あるいは居住域を含む生産域の変化（畑作・水田共用型から水田志向型への転換）による結果なのか。今後の検討課題である。さらに個別の古墳を見るなら、近戸古墳群４号墳が注目されよう。円筒埴輪列下の周堀、周堀脇に造られた埴輪土壙、さらには周堀外に樹立されたことが出土状態から判断される埴輪群など円筒埴輪の意味を考える上で貴重な資料である。また、この古墳からは三鈴杏葉が一対出土している。この三鈴杏葉はこれまでは型式的に新しいとされてきたものであるが本古墳から出土したことにより、やや時代観を訂正する必要がでてきたようである。これについても今後の詳細な検討に譲りたい。

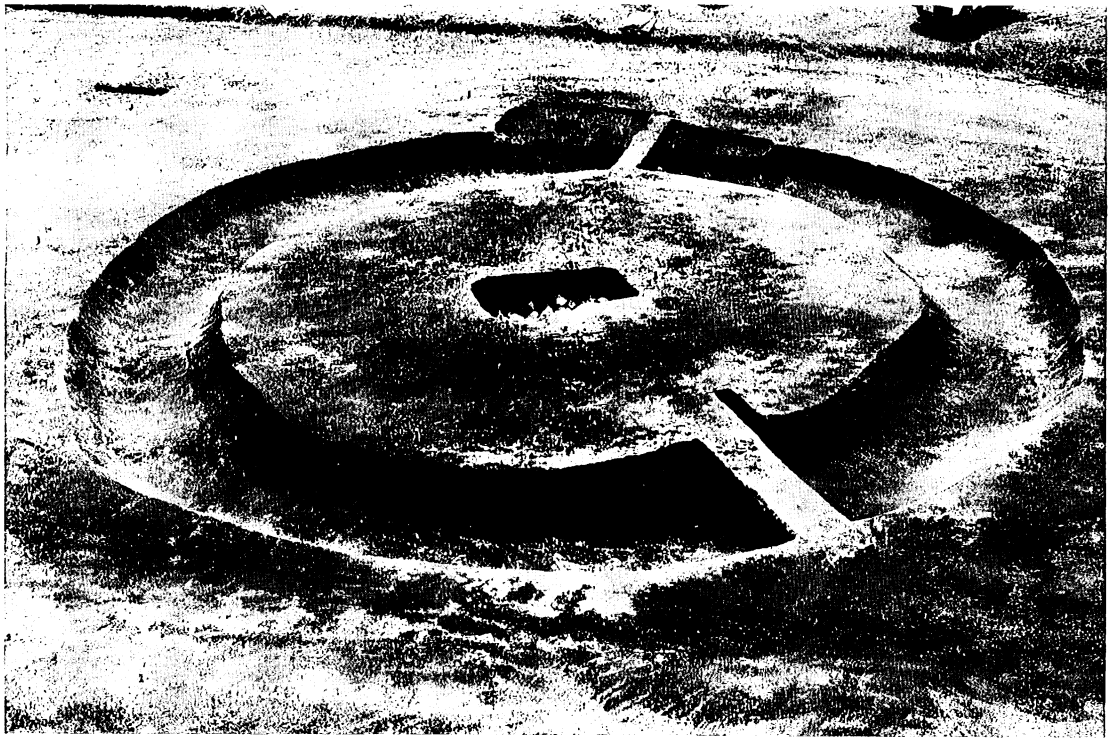


三騎堂古墳群　試掘状況

三騎堂古墳群　遠景（西より）

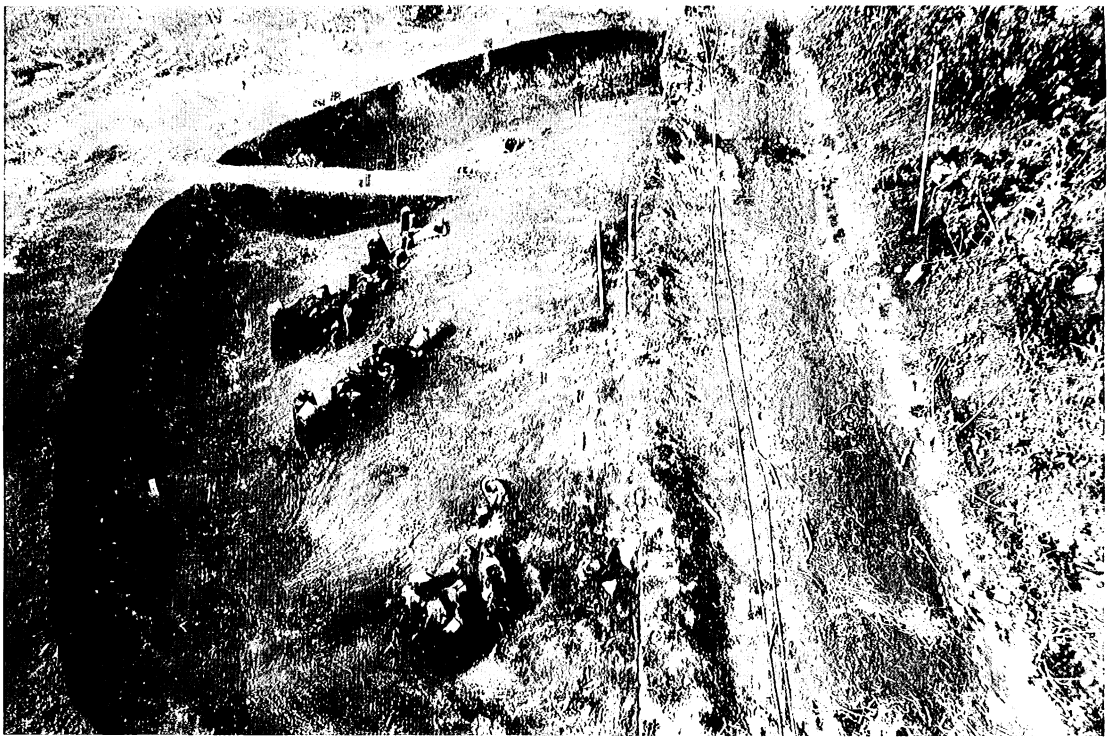


三騎堂古墳群　1号墳全景（西より）



三騎堂古墳群　2号墳（北より）

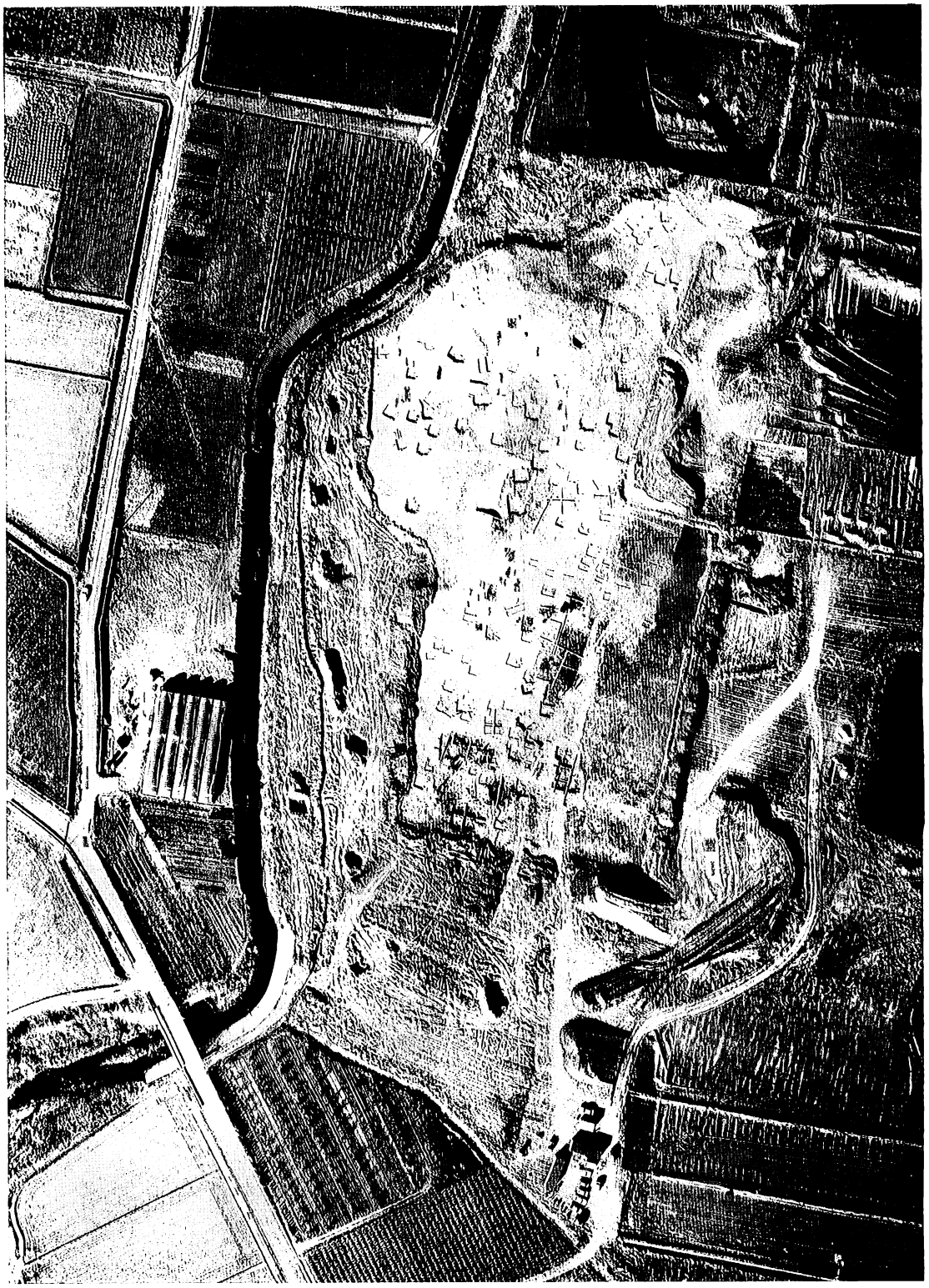
三騎堂古墳群　1号墳周堀内円筒埴輪出土状態



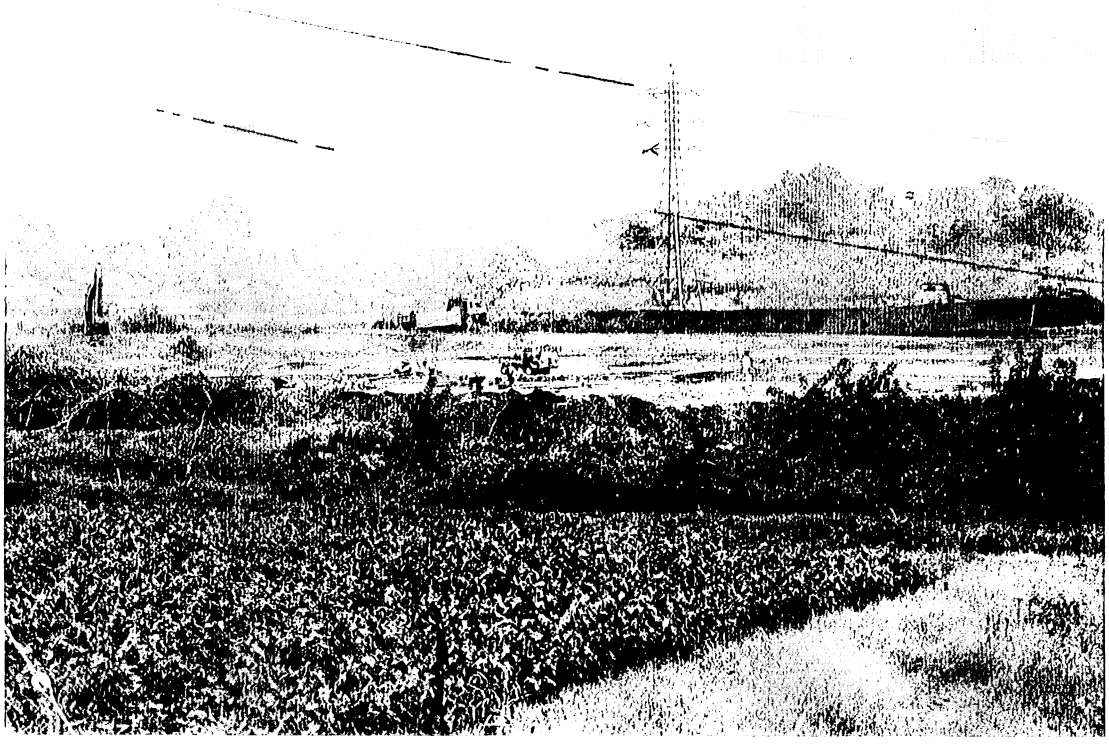
三騎堂古墳群　4号墳円筒埴輪出土状態

三騎堂古墳群　2号墳主体部蓋石開口前

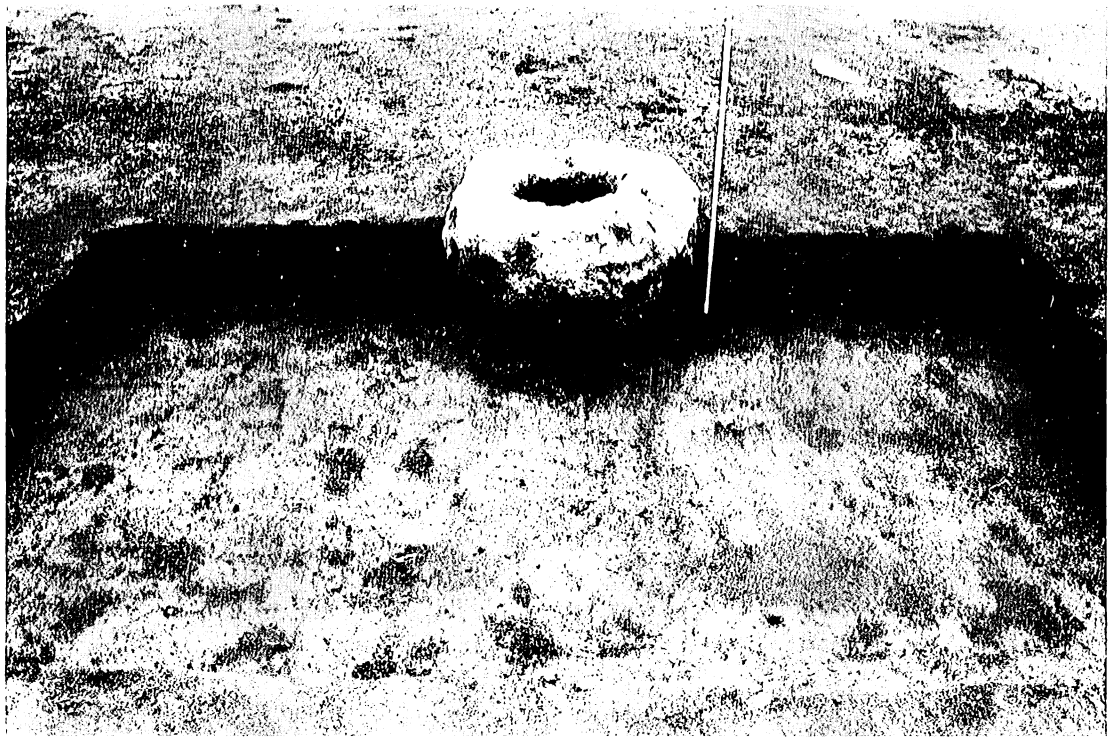
三騎堂古墳群　2号墳主体部蓋石開口後



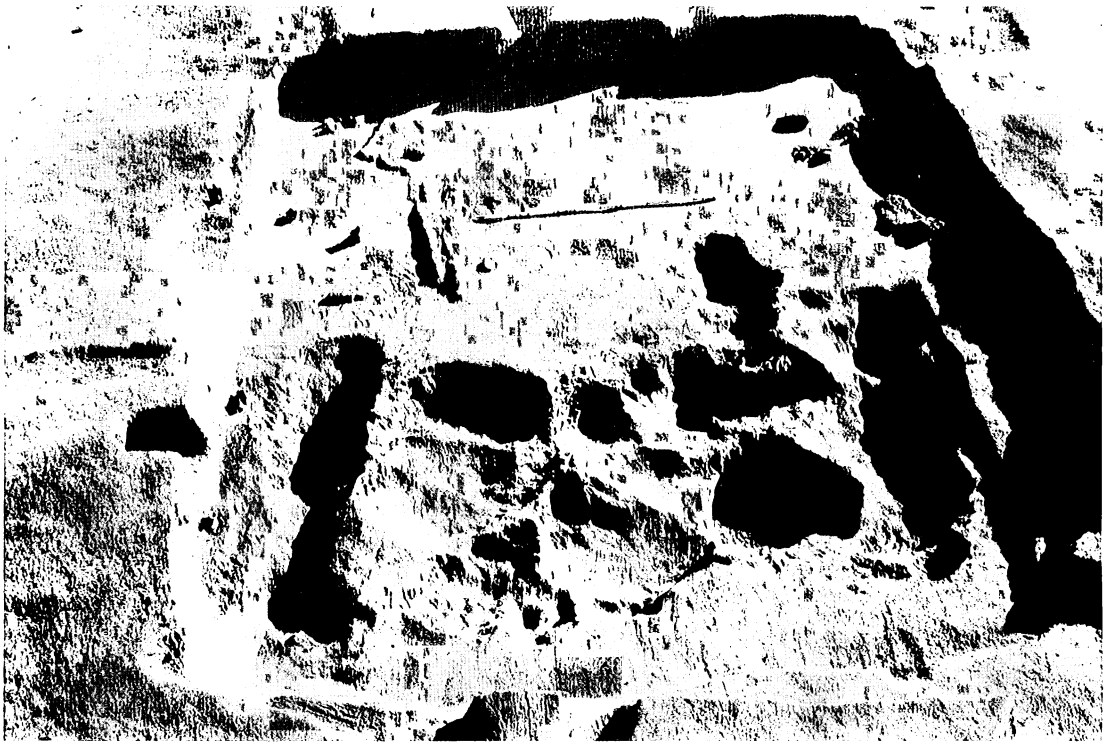
五反田遺跡　全景



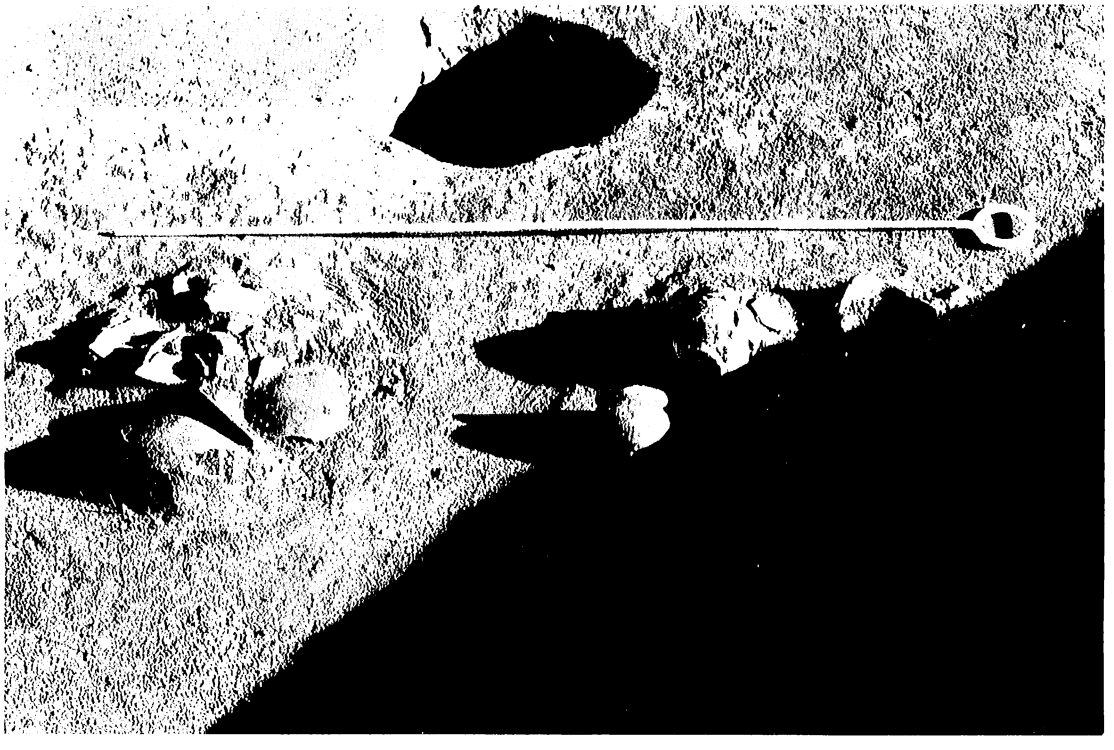
五反田遺跡　遠景



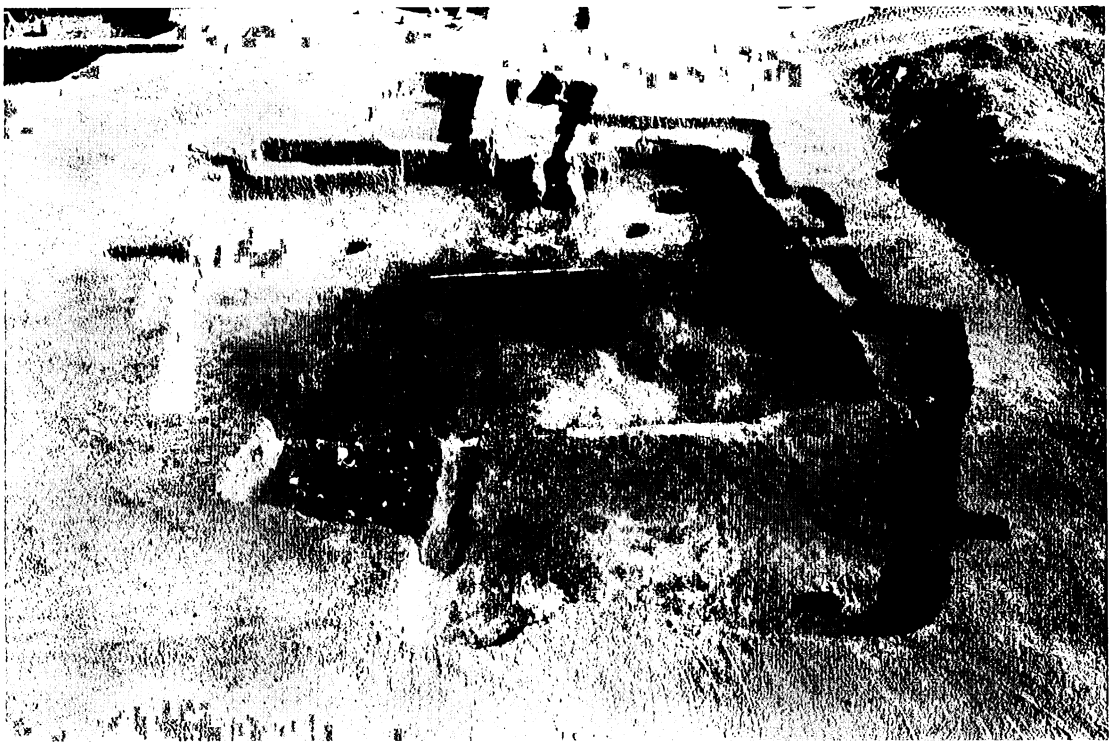
五反田遺跡　石製蔵骨器出土状態



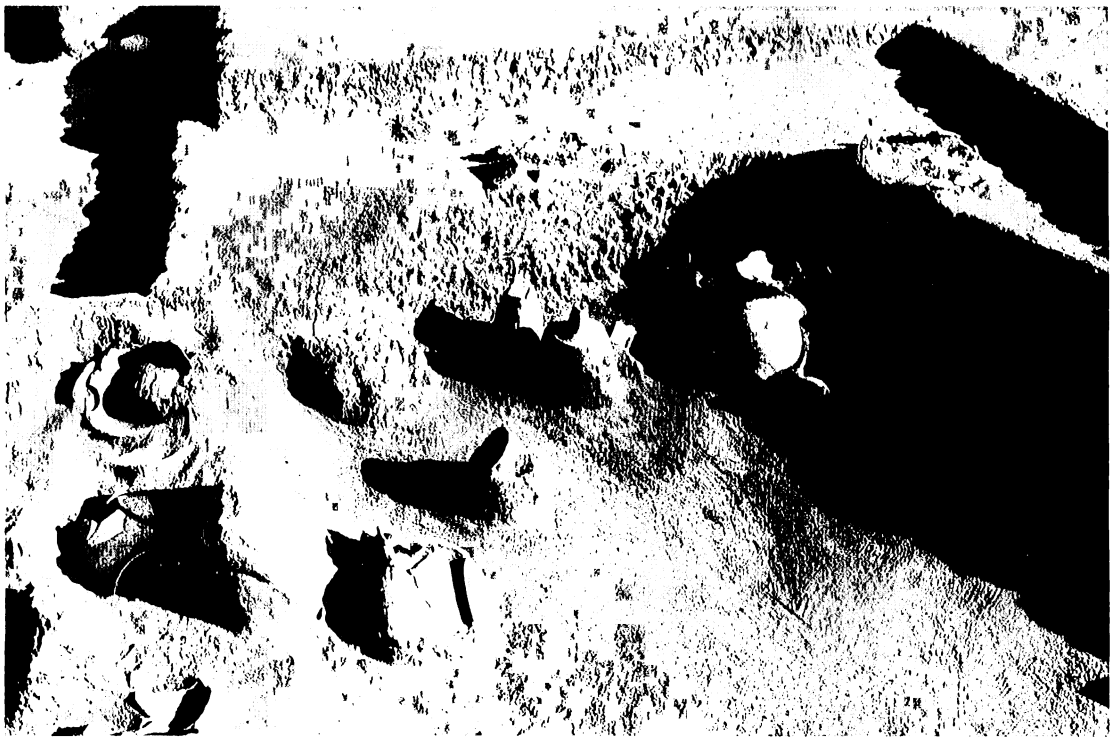
五反田遺跡　160号住居（古墳時代前期）全景（西より）



五反田遺跡　160号住居遺物出土状態

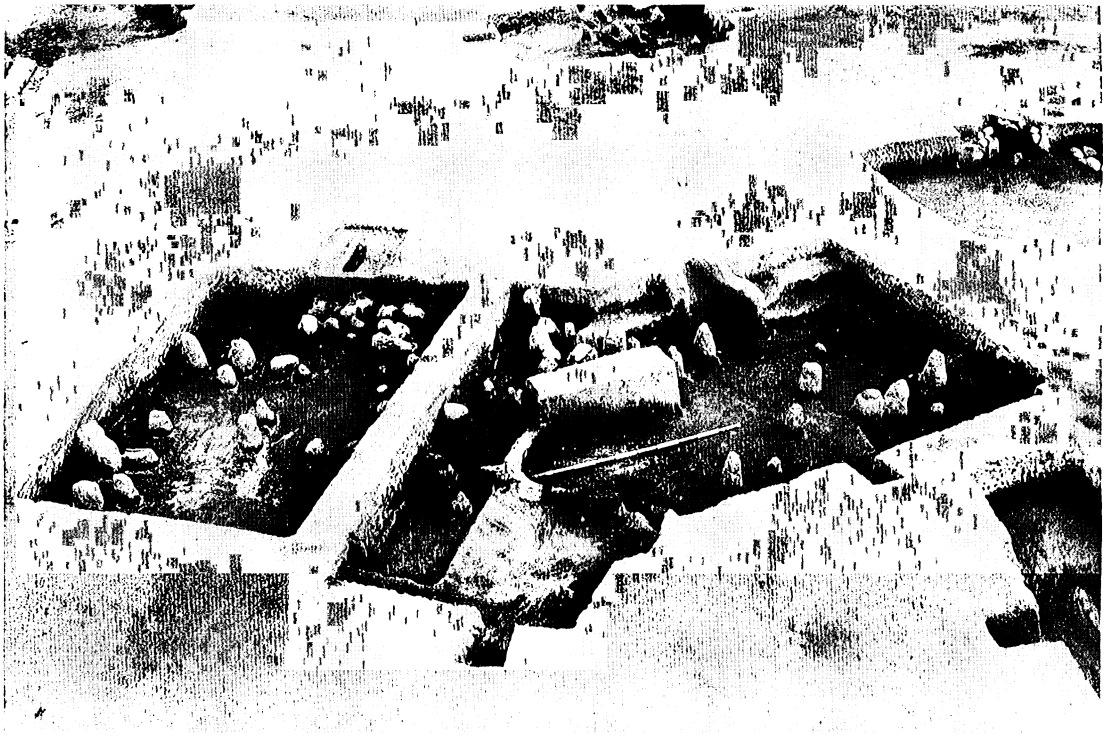


五反田遺跡　142号住居（古墳時代中期後半）全景（西より）



五反田遺跡　142号住居（古墳時代中期後半）遺物出土状態

五反田遺跡　20号住居（古墳時代後期）全景



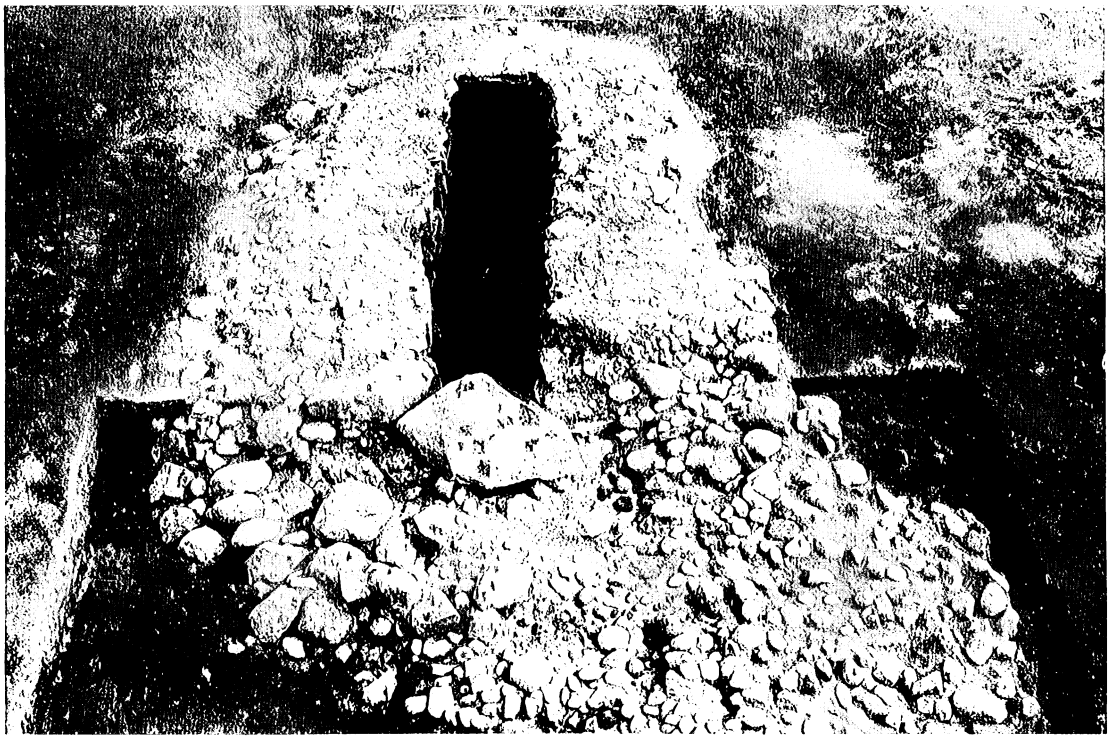
五反田遺跡　5号住居（平安時代）全景

近戸古墳群　遠景（南西より）

近戸古墳群　1号墳主体部調査状況

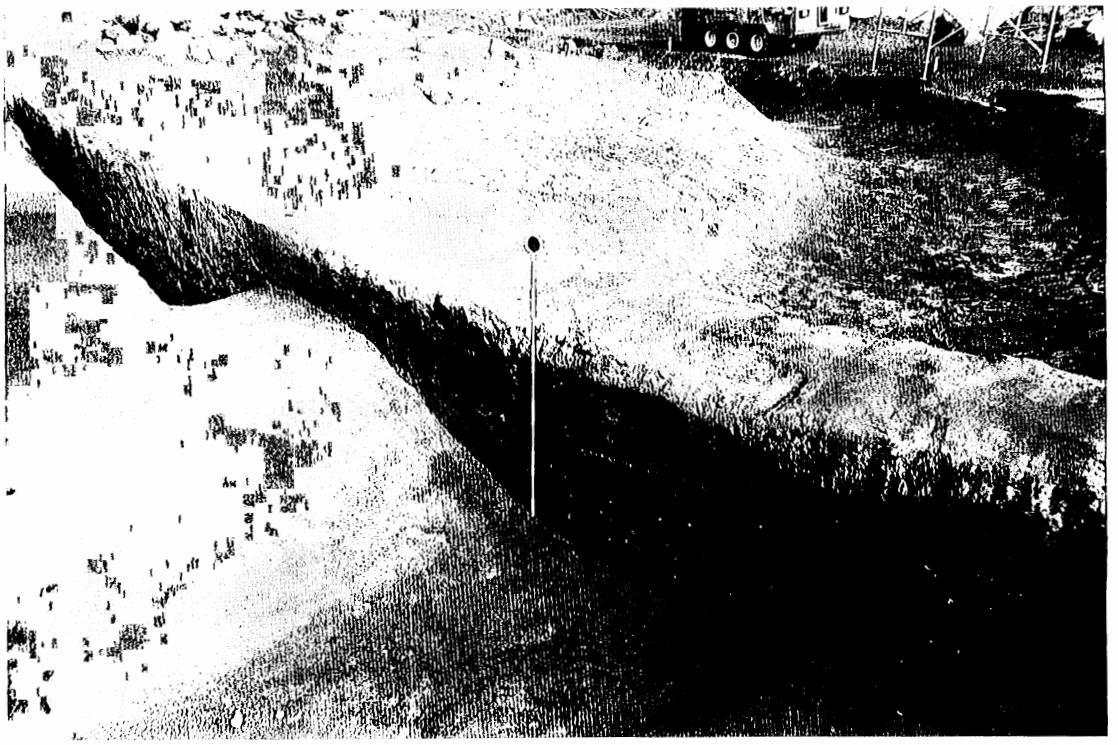
近戸古墳群　1、2、3号墳遠景

近戸古墳群　1号墳主体部（南より）

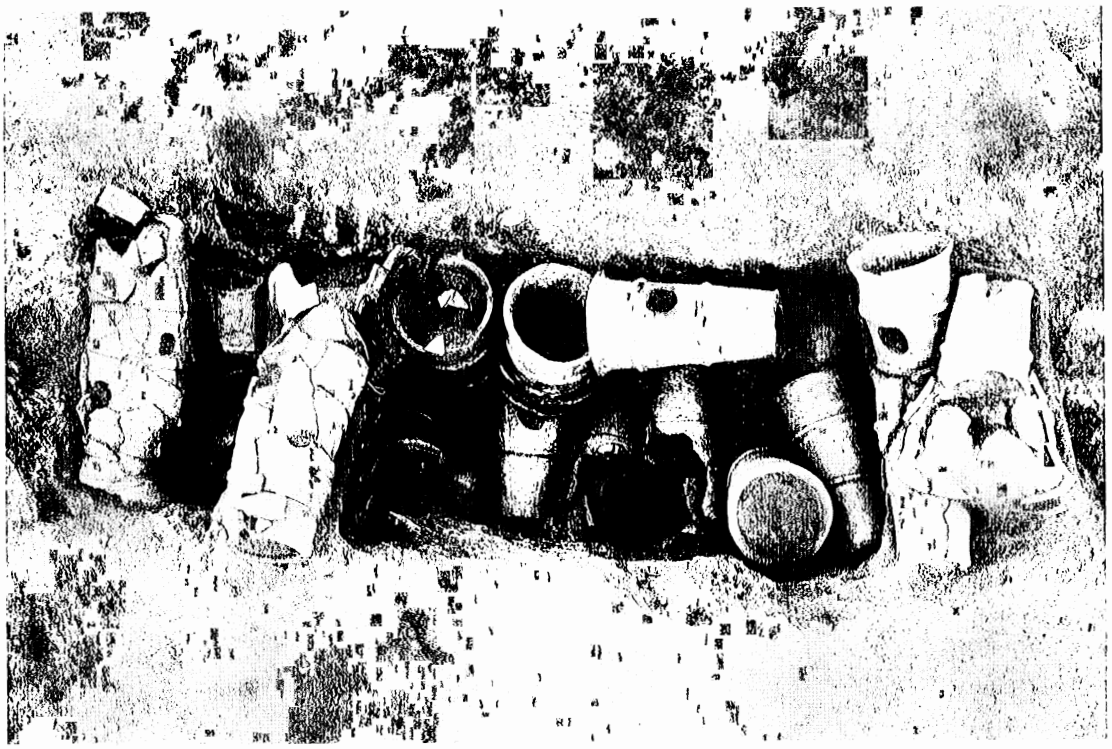


近戸古墳群　3号墳主体部（西より）

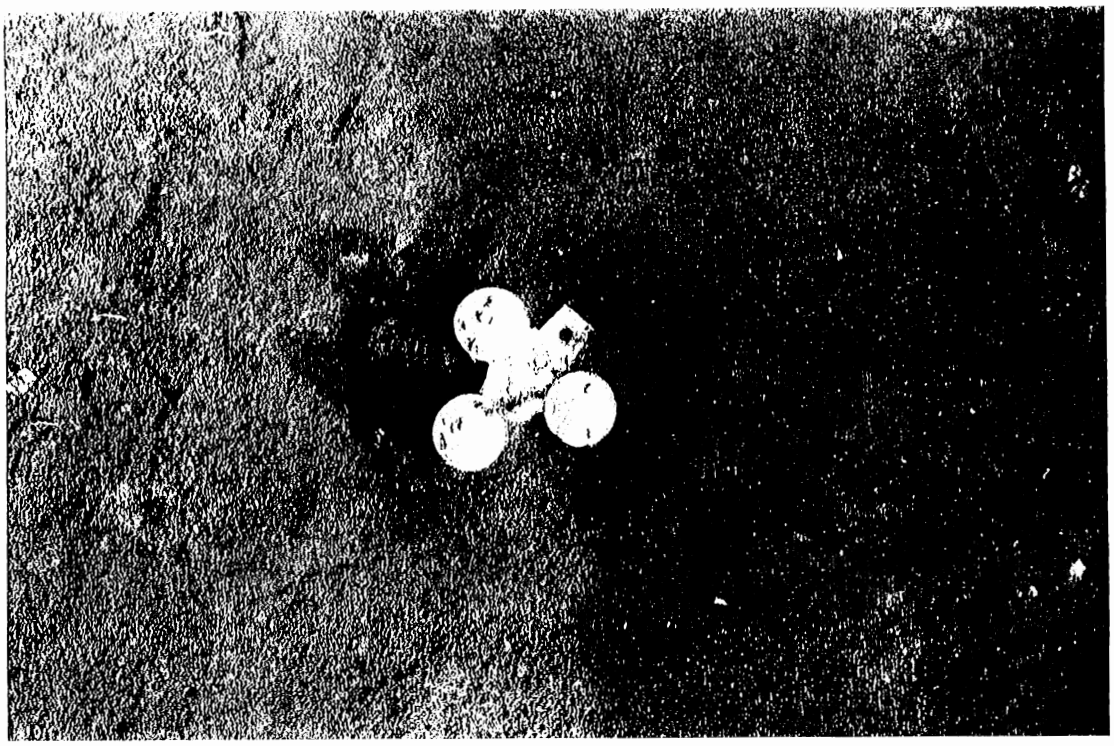
近戸古墳群　4号墳調査開始前の状況



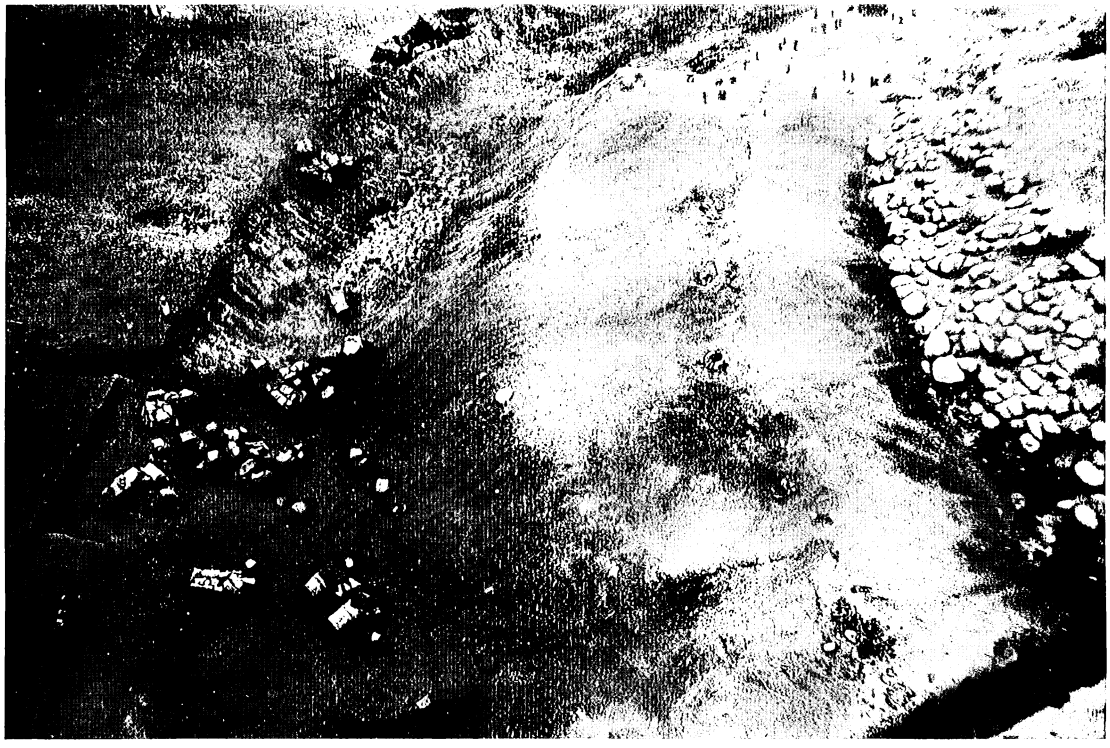
近戸古墳群　4号墳周堀土層堆積状況



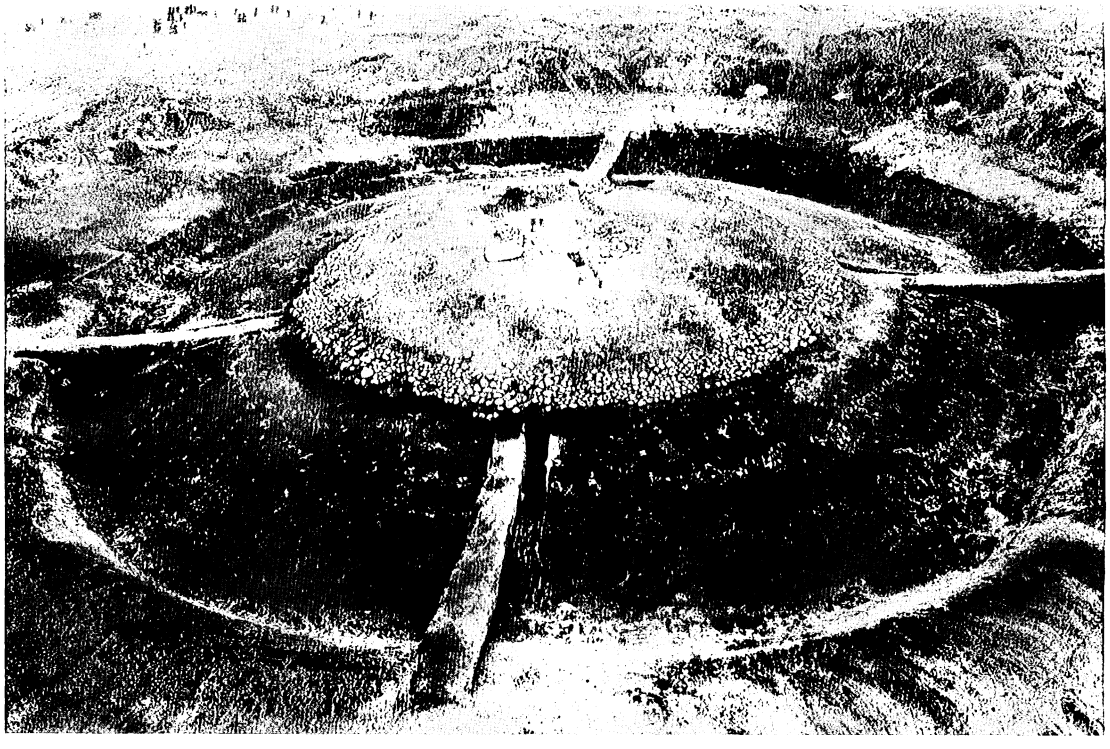
近戸古墳群　4号墳周堀外土壙内埴輪出土状態



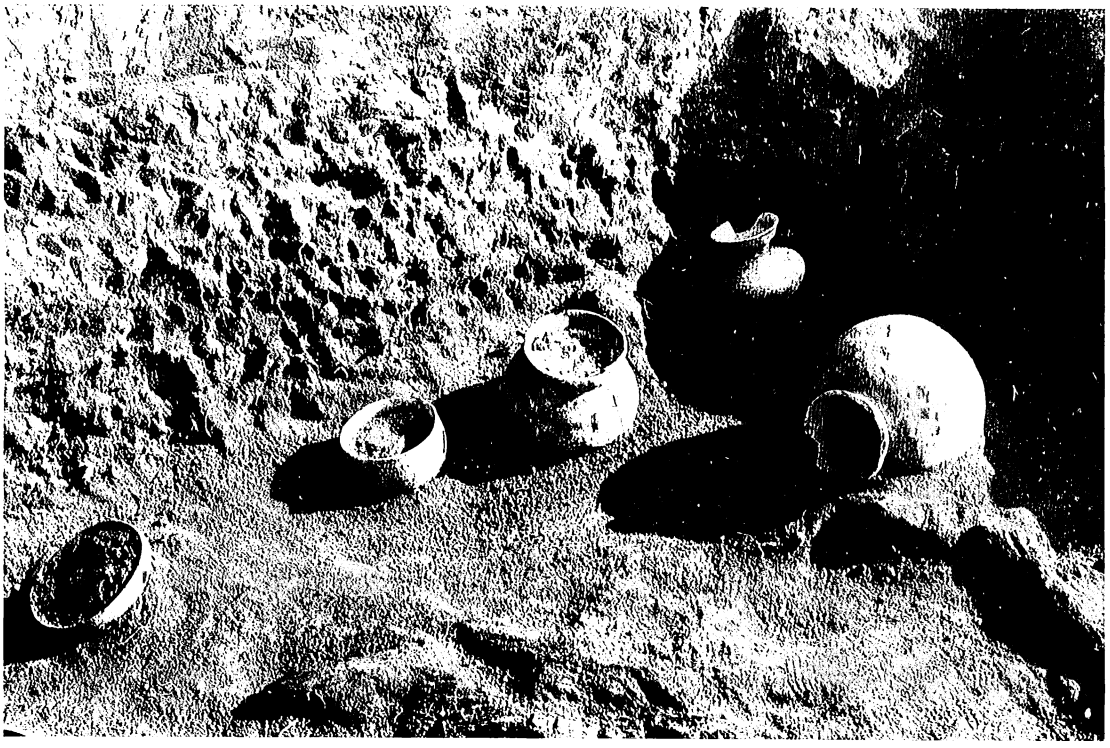
近戸古墳群　4号墳周堀内出土三鈴杏葉



近戸古墳群　4号墳埴輪出土状況



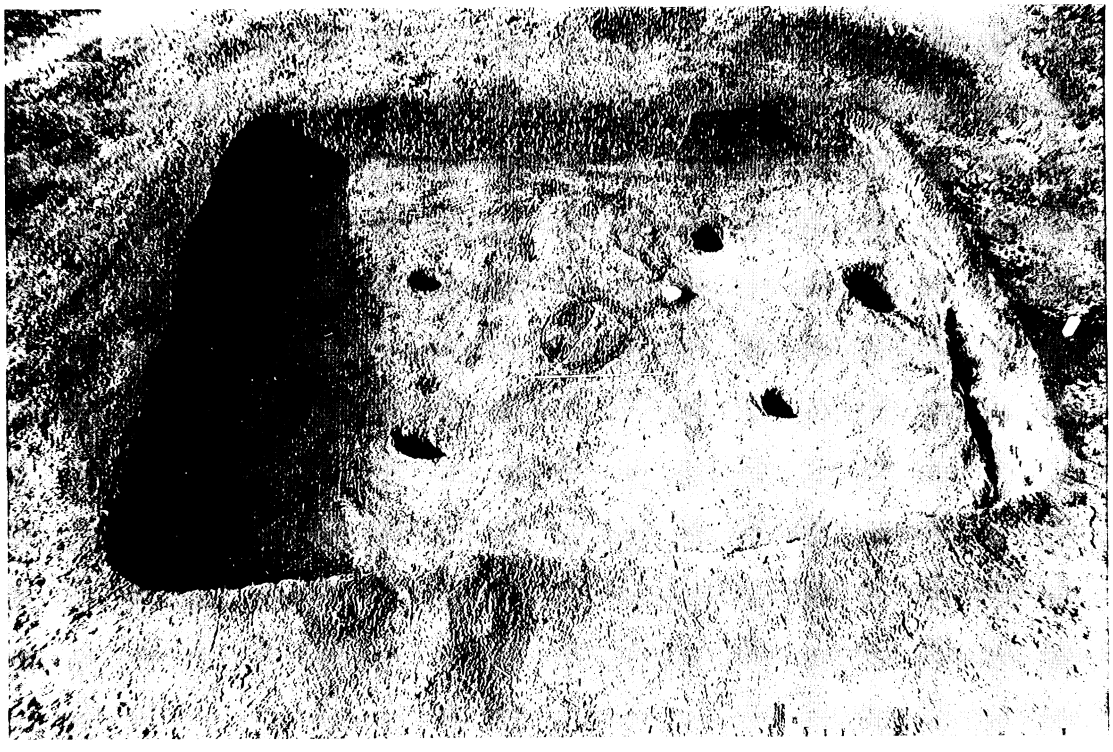
近戸古墳群　4号墳全景



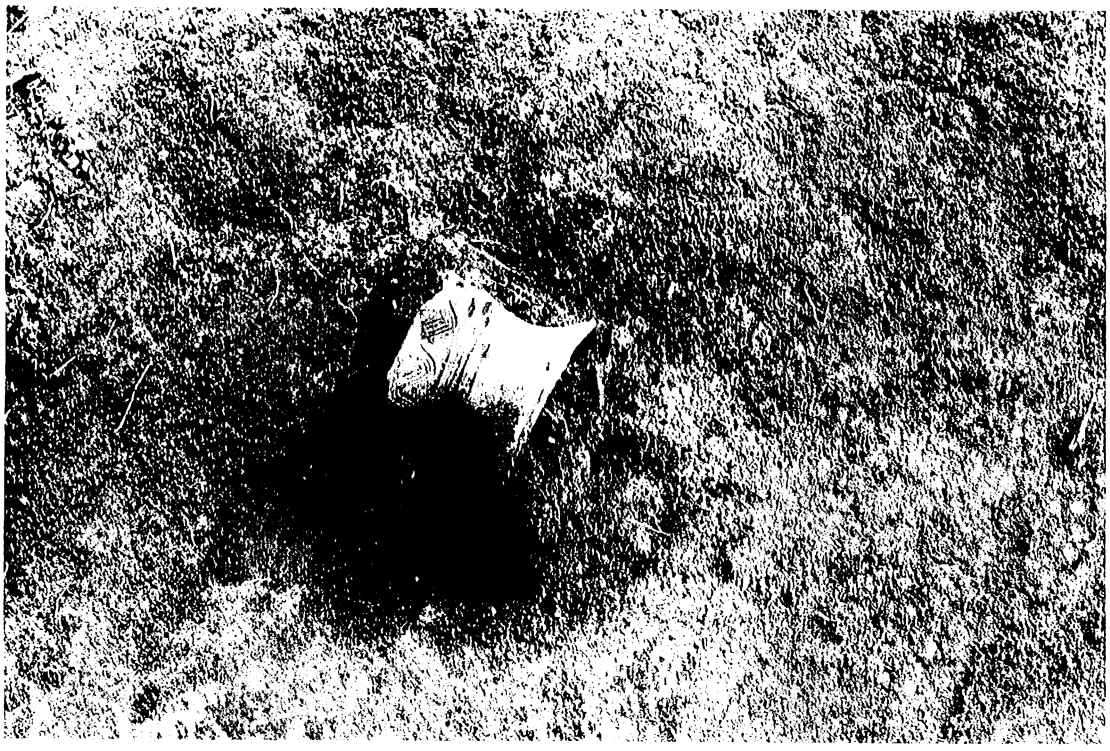
近戸古墳群　5号住居全景

近戸古墳群　5号住居遺物出土状態

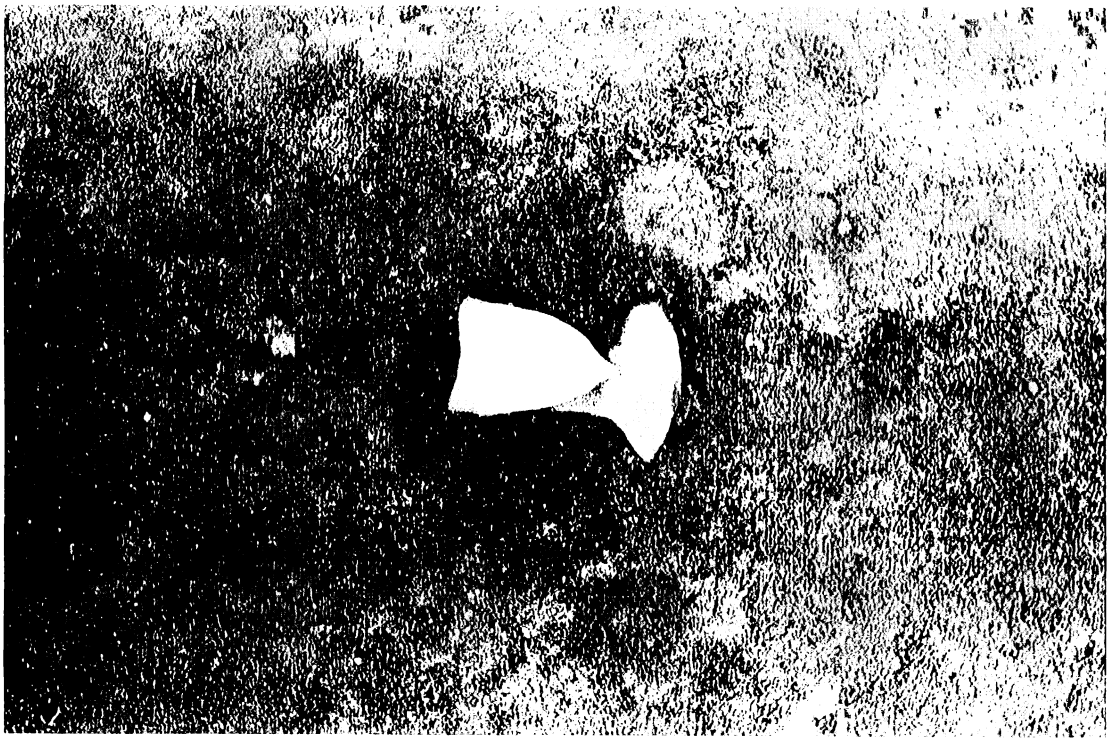
前原遺跡　遠景



前原遺跡　2号住居全景



前原遺跡　2号住居遺物出土状態



前原遺跡　2号住居磨製石鏃出土状態

付　篇――――――――――粕川村三騎堂古墳群出土人骨について

聖マリアンナ医科大学第二解剖学教室
教授　森本岩太郎

Ⅰ．はじめに

昭和61年10月、群馬県勢多郡粕川村深津所在の三騎堂古墳群２号墳から６世紀前半に属する古人骨１個体分が出土した。粕川村教育委員会からの委嘱により筆者がこの人骨を調べたので、ここに報告する。

Ⅱ．人骨の出土状態

三騎堂古墳群２号墳主体部における石棺の長軸は、ほぼ東北東から西南西方向へと走っている。調査記録によれば、人骨はこの石棺内から東北東頭位の仰臥伸展位で出土した。人骨の保存状態は良いとは言えず、小さな骨は腐食によりほとんど消失し、大きな骨も部分的にしか残っていないが、頭蓋だけは例外的に比較的良く保存されている。人骨の配列は解剖学的に自然である。人骨は焼けておらず、また人骨に赤色物の付着は見られない。

Ⅲ．人骨所見（写真１～４）

残存する人骨は、頭蓋、椎骨、左右の肋骨、胸骨、右の肩甲骨、左右の鎖骨・上腕骨、左右不詳の中手骨、左右の寛骨・大腿骨・脛骨の各片である。

頭蓋については、脳頭蓋の左後半部ならびに左の頬骨弓・下顎頭付近が欠損しているだけで、その他の部分は比較的良く保存されている。額がゆるく傾斜し、眉弓および眉間が隆起し、鼻根部が陥凹し、乳様突起が膨隆して大きく、下顎角が外反するなど、男性頭蓋としての諸特徴を備えている。頭蓋冠の３主縫合は内・外板ともまだ完全に開いている。頭蓋の主要計測値および示数を第１表に示す。この表によれば、顔面は顔示数（Virchow）および上顔示数（Virchow）による広顔型、眼窩は中眼窩型、鼻は広鼻型に属する。観察事項として頭蓋の形態小変異の存否を第２表に示す。

歯は上下左右とも中切歯から第２大臼歯まで合計28本が揃っており、智歯は未萌出である。歯の咬合様式は鋏状咬合型で、咬耗度は Broca の１度である。下顎左第１大臼歯に歯周症によると思われる歯槽縁の吸収像が認められる。

椎骨としては、頸椎・胸椎・腰椎・仙骨の各破片がある。頸椎片としては第１頸椎（環椎）・第３～５頸椎などがほぼ完全に残っている。胸椎片としては８個の胸椎体のほかに椎弓片などが見られる。腰椎片としては第１～５腰椎が不完全ながら残っており、また仙骨片としては第１～２仙椎全面の破片が認められる。

胸骨片として胸骨体片が僅かに残り、肋骨は右肋骨片が８個（第１肋骨を含む）、左肋骨片が９個（第１肋骨を含む）あり、ほかに左右不詳の肋骨細片が数個ある。

上肢骨については、まず左右の鎖骨がその両端を欠くだけで、ほぼ全長にわたって残っている。肩甲骨は右の肩甲骨外側角と烏口突起の部分が見られるだけである。上腕骨は左右の骨体の一部があるが、結節間溝をもつ右の骨体片（約26cm）のほうが、左の骨体片（約11cm）よりもやや残りは良い。ほかに、左右不詳の中手骨体片が１個ある。

下肢骨については、まず比較的保存の良い左右の寛骨片がある。大坐骨切痕の形は欠損のため分からないが、恥骨下角は小さい。恥骨結合面には横走する畝のような隆条が幾つも明瞭に見られる。大腿骨は、右側が下端を欠き、左側が上・下端を欠く。左大腿骨体中央部の横断示数は100.0を示し、ピラステルの形成は認められない。脛骨は、右が骨体後面の上半部、左が骨体内側面・外側面の中央部をそれぞれ残してい

る。骨体前縁は比較的鋭い。

以上の人骨片はいずれも頑丈とは言えず、また骨表面における筋付着部の発達程度も概して中等度以下であり、壮年期の男性にしては骨格から筋骨たくましいという印象は必ずしも受けない。目立つような骨の外傷・病変は認められない。

Ⅳ．まとめ

粕川村三騎堂古墳2号墳主体部石棺内からほぼ東頭位の仰臥伸展位で出土した6世紀前半に属する人骨は壮年期前半の比較的若い男性1個体分と思われる。骨格は必ずしも頑丈ではないが、特記すべき病変や外傷は見当たらない。

第1表．三騎堂古墳2号墳出土頭蓋の計測値および示数（項目番号は Martin による）。

	項目	数値（mm）
5	頭蓋基底長	95
9	最小前頭幅	94
40	顔長	94
46	中顔幅	105
47	顔高	117
48	上顔高	69
51	眼窩幅(右)	41
52	眼窩高(右)	34
54	鼻幅	26
55	鼻高	50
61	上顎歯槽幅	60
69	オトガイ高	33
69(3)	下顎体厚(左)	10
70 a	下顎頭高(右)	45
71 a	最小下顎枝幅(右)	34
47／46	顔示数(V)	111.4
48／46	上顔示数(V)	65.7
52／51	眼窩示数(右)	82.9
55／54	鼻示数	52.0

第2表．三騎堂古墳2号墳出土人骨頭蓋の形態小変異の存否。(+)は存在、(−)は無し、(?)は不明。

項目	右	左
内側口蓋管骨橋	(−)	(−)
翼棘孔骨橋	(−)	(−)
舌下神経管二分	(−)	(−)
床状突起間骨橋	(−)	(−)
顆管欠如	(−)	(−)
鼓室骨裂孔	(−)	(−)
眼窩上縁孔	(−)	(−)
副眼窩下孔	(+)	(−)
顎舌骨筋神経溝骨橋	(−)	(−)
副オトガイ孔	(−)	(−)
前頭縫合	(−)	
二分頬骨・頬骨後裂	(−)	(−)
インカ骨	(−)	
頭頂切痕骨	(−)	(?)

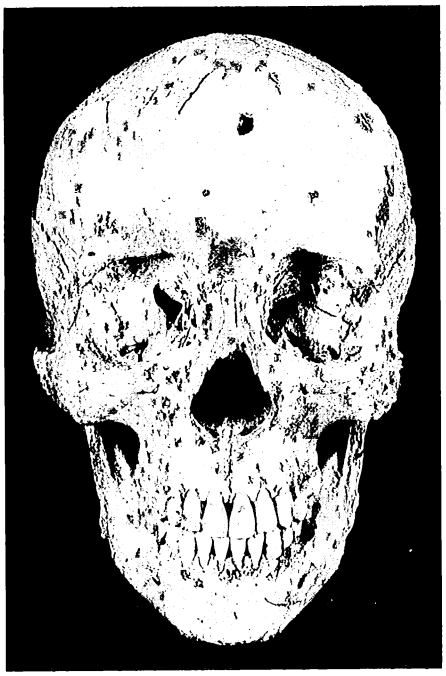


写真１　三騎堂古墳群２号墳出土人骨の頭蓋前面観。

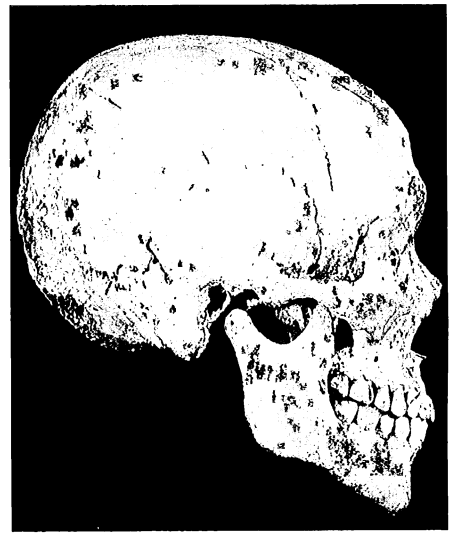


写真２　三騎堂古墳群２号墳出土人骨の頭蓋右側面観。

写真４　三騎堂古墳群２号墳出土人骨の上肢骨（写真の右上段）および下肢骨（写真の左下段）の各主要骨片。

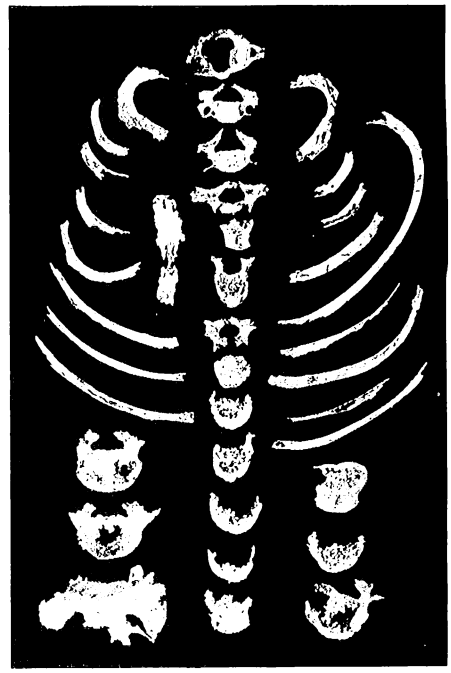


写真３　三騎堂古墳群２号墳出土人骨の椎骨・仙骨（写真の中央および下段）、胸骨（写真の中央椎骨列の左）および肋骨（写真の上段左右）の各主要骨片。

深津地区遺跡群

——昭和61年度県営圃場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査の概要——

昭和62年2月1日　印刷
昭和62年3月31日　発行

編集
発行　粕川村教育委員会

印刷　朝日印刷工業株式会社